

2017 年度

# 自己点検評価報告書

2018 年 4 月



## 目 次

### 自己点検評価報告書

はじめに	1
1 文学研究科委員会	2
2 経済学研究科委員会	3
3 社会福祉学研究科委員会	5
4 文学部	7
5 文学部 英文学科	8
6 文学部 心理・応用コミュニケーション学科	10
7 経済学部	12
8 経済学部 経済学科	13
9 経済学部 経営情報学科	15
10 経済学部 経済法学科	17
11 社会福祉学部	18
12 社会福祉学部 福祉計画学科	19
13 社会福祉学部 福祉臨床学科	21
14 社会福祉学部 福祉心理学科	24
15 短期大学部	26
16 短期大学部 英文学科	27
17 短期大学部 生活創造学科	29
18 共通科目部門会議	31
19 言語教育部門会議	33
20 教職部門会議	35
21 企画運営会議	(省略)
22 教学会議	37
23 学則諸規程委員会	39
24 全学危機管理委員会	40
25 自己点検評価委員会	41
26 教員評価委員会	42
27 運営・財務点検委員会	43
28 学生支援委員会	45
29 広報委員会	47
30 図書館運営委員会	49
31 FD 委員会	50
32 スミス・ミッションセンター運営委員会	51
33 国際教育推進委員会	54
34 学生相談専門委員会	56
35 キャリアデザイン支援委員会	58
36 社会連携センター運営委員会	60
37 総合研究センター（研究支援委員会）	62
38 総合情報センター運営委員会	64
39 心理臨床センター運営委員会	65
40 入学試験センター委員会	(省略)

41	学習支援推進委員会	67
42	アクセシビリティ支援委員会	69
43	安全衛生委員会	71
44	事務局報告	73

## はじめに

北星学園大学

北星学園大学短期大学部

学長 田村 信一

大学は 1981 年に北海道の私立大学としては最初に大学基準協会に加盟し、また 1991 年の大学設置基準改正によって点検・評価が努力義務とされたことを受け、直ちに点検・評価作業を実施した。

1993 年に「点検評価に関する規程」を制定し、学長を委員長とする「全学点検評価委員会」を中心として、定期的な点検評価に取組む態勢を整備した。2000 年にはその「自己点検・評価報告書」をもとに、大学基準協会の相互評価を受けることができた。

さらに 2005 年には大学の組織運営体制の改編が行われ、また自己点検評価の実施とその結果の公表が義務付けられることから、「点検評価に関する規程」を改正し、新たな「自己点検評価委員会」による点検評価体制と学外への公表に関する規程を整備した。こうした体制によって、2007 年に大学基準協会に大学評価を申請し、翌 2008 年に適合認定を受けることができた。その際指摘された助言については、2012 年に大学基準協会へ改善報告書を提出したが、「改善報告書検討結果」では、いくつかの点で「引き続き一層の努力が望まれる」とされたものの、「助言を真摯に受け止め、意欲的に改善に取組んでいることが確認」され、今後の改善経過について再度報告を求める事項は「なし」との判断であった。

短期大学部においては、1991 年に「教育・研究評価に関する特別委員会」を設置して、教育・研究の活性化を念頭においた点検・評価作業に着手し、2002 年に大谷地キャンパスに移転後は大学とともに点検・評価作業を実施している。

短期大学部は短期大学基準協会に加盟し、2007 年に第三者評価を申請し、翌 2008 年に適格認定を受けることができた。

2014 年には大学と短期大学部がそれぞれ、大学基準協会と短期大学基準協会に大学評価、第三者評価を申請し、翌 2015 年に適合、適格の認定を受けた。

大学の評価結果において、「長所として特記すべき事項」は 1 つ、「努力課題」は 8 つ付された。短期大学部の評価結果においては、「特に優れた試みと評価できる事項」は 6 つ、「向上・充実のための課題」は 3 つ付された。大学に付された 8 つの努力課題については、2019 年 7 月末日までに大学基準協会に「改善報告書」を提出する必要があり、自己点検評価委員会を中心に対応を進めている。

認証評価は 2018 年から、いわゆる第 3 期目に入る。評価項目も、内部質保証に関する事項が重点項目とされ、いわゆる 3 ポリシーや SD 義務化に伴い事務組織に関する事項が追加されるなど、変化してきている。それらの変化への対応を念頭に置きつつ、毎年度実施しているこの本学独自の点検・評価結果を大学全体として共有し、「質の保証」と「質の向上」に繋がるよう、実質的な P D C A サイクル [Plan (計画) → Do (実行) → Check (評価) → Act (改善) サイクル] の確立を目指すことが重要な課題である。

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 1. 文学研究科委員会【報告者：研究科長 萩内 豊】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。

「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
A	A	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
A	A	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
A	A	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>次年度への課題に挙げられている、認証評価に係るカリキュラム・ポリシーの改善について、引き続き取組むこと。</li></ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>該当なし。</li></ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"><li>「魅力的な大学院像の再構築」に向けたカリキュラム改革等の検討の継続</li><li>大学基準協会による認証評価において改善が必要との提言がなされたカリキュラム・ポリシーについての検討</li><li>大学院進学希望者の掘り起し戦略の検討の継続</li></ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"><li>「魅力的な大学院像の再構築」に向けたカリキュラム改革等の検討の継続 魅力的な大学院像についてのFD（9月14日）を設け、2018年度開始のカリキュラム改革を行った。具体的には従来の授業科目を整理するとともに、言語文化研究分野を文学・文化研究分野に改称し、新しい担当者を加えた。</li><li>カリキュラム・ポリシーについての検討 カリキュラム改編に伴い、カリキュラム・ポリシーを中心に改めて3ポリシーについて検討・修正を行った。</li><li>大学院進学希望者の掘り起し戦略の検討の継続 大学院進学説明会、学科やゼミでの情報提供を行った。しかしながら、その効果を得るまでには至らなかった。</li><li>その他 株札幌副都心開発公社、および、札幌市厚別区による外部評価の意見書を受けて、教育目標に資する教育課程になっていること、研鑽・研究できる体制が構築できていることなどを確認した。</li></ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"><li>大学院進学希望者の掘り起し戦略の検討の継続</li></ol>
自己点検評価委員会からの評価	<p>【評価点】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>認証評価に係るカリキュラム・ポリシーの改善を中心に、3ポリシーの検討・修正を行ったことを評価する。</li></ul> <p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>入学者の確保に努めること。</li></ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>該当なし。</li></ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 2. 経済学研究科委員会【報告者：研究科長 原島 正衛】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。

「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
A	A	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
A	A	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
A	A	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・次年度への課題に挙げられている、認証評価に係るカリキュラム・ポリシーの改善について、引き続き取組むこと。</li></ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・大連外国语大学からの入学者が得られない状況が続いているので、募集活動も含め姉妹校提携推薦入試の是非についての検討に着手すること。</li></ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"><li>研究科教育課程の検証と改善の検討（大学基準協会による認証評価・株札幌副都心開発公社からの指摘事項を含む）</li><li>学内外進学者の掘り起こしのための効果的告知方法の検討</li></ol>
	<p>1. 研究科教育課程の検証と改善、認証評価に係るカリキュラム・ポリシーの改善（【努力課題】）</p> <p>大学基準協会の認証評価による努力課題を受け、カリキュラム（改編も含む）にあわせたポリシーの検討・改善を行った。</p> <p>三者連携協定を締結している札幌市厚別区、株札幌副都心開発公社による意見書により、「学位授与方針に沿った教育課程となっている」、「専門的な知識を習得し得る充実した課程となっており、ポリシーにも示されている研究と実践的能力を有する人材養成につながっている」等、教育課程に対して一定の評価を得ることができた。一方で「科目段階での地域性（北海道経済への影響と課題）の工夫があればよい」、「地域経済の実態を学ぶインターンシップなどキャリアデザインに役立つ実践的なカリキュラムがあって面白いのではないか」等の指摘を受けた。今年度は、入学志願者の志向・動向にあわせた形でカリキュラム改編を行い、2名の新規教員による科目的設置を行ったが、科目段階での地域性の工夫、キャリアデザインに資する科目的設置については、具体的な検証、改善を検討するところまでは至らなかつた。</p> <p>2. 学内外進学者の掘り起こし</p> <p>告知方法については、昨年度に引き続き、先取り履修制度に関する案内書をゼミ担当教員より経済学部3年次全員に配布を行うとともに説明会を企画した。しかし、説明会は開催するに留まり参加者を得ることはできなかつた。学内外進学者の掘り起こし方策については、2回開催した研究科FDの中で教育課程の検討とともに検討を行つたが、効果的な新規の告知方法のアイデアを得られるまで至らなかつた。しかし、教員によるゼミでの声かけ等の努力により、今年度は学内より3名の志願者を得ることができた。</p> <p>教育課程の関係では、昨年度、社会人入学者が得られたこともあり、研究科FDにて長期履修制度創設のアイデアが出され、来年度具体的に検討することとした。</p> <p>3. 【改善勧告】大連外国语大学からの入学者・志願者</p> <p>大連外国语大学への志願者募集に関しては、2回開催した研究科FDの中でも検討を行う</p>

	<p>とともに、11月に実施した説明会における告知方法の改善に努めた。具体的には、説明会の告知ポスターへの実績に基づいた研究分野の記載、説明会におけるプレゼンテーション方法・内容等、より本研究科の魅力を伝える努力を行った。来年度受験に結びつくかははつきりしないものの、説明会終了後に興味があるという学生の申し出がある等、一定の効果があったと考えている。</p> <p><b>4. 入試関係</b></p> <p>第2期試験において募集定員を上回る入学者を得ることができた。今回の出願者は、ゼミにおける教員からの声かけに効果があったと判断している。</p>
次年度への課題	<p>1. 研究科教育課程の検証と改善の検討（大学基準協会による認証評価・札幌市厚別区・(株)札幌副都心開発公社からの指摘事項を含む）</p> <p>2. 学内外進学者の掘り起こしの方策の検討（大連外国语大学からの進学者を含む）</p>
自己点検評価委員会から の評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・認証評価に係るカリキュラム・ポリシーの改善を中心に、3ポリシーの検討・修正を行ったことを評価する。</li> <li>・研究科で検討し告知の改善に努めたにも関わらず、大連外国语大学からの志願者が得られなかつたのは残念であった。また学外からの入学者は得られなかつたが、学内進学者を得られたことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学者確保の努力は認めるが、大連外国语大学からの入学者が得られない状況は続いているので、妹校提携推薦入試の是非についての検討を行うこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 3. 社会福祉学研究科委員会【報告者：研究科長 田中 耕一郎】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。

「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
A	A	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
A	A	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
A	A	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・次年度への課題に挙げられている、認証評価に係る課題の改善について引き続き取組むこと。</li></ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・該当なし。</li></ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"><li>1. 大学院志願者の確保に関わる方策を検討する。</li><li>2. 修士・博士課程の指導体制の充実・強化を図る。</li><li>3. 公認心理師、認定社会福祉士など、資格に関連する諸課題について検討していく。</li><li>4. 2016 年度の研究科 FD の協議結果をもとに、魅力ある大学院づくりに取組んでいく。</li><li>5. 大学基準協会による認証評価において努力課題として指摘のあった課題について取組んでいく。</li></ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"><li>1. 大学院志願者の確保に関わる方策の一環として、認定社会福祉士研修の認証、公認心理師対応カリキュラムの設定、3 ポリシーの改訂等取り組んだ。</li><li>2. 修士課程の指導体制の充実を図るべく、新たに科目担当者 2 名を追加した。</li><li>3. 認定社会福祉士に関する研修の認証について協議し、2018 年度から 2020 年度の研修認証 5 科目を申請した。</li><li>4. 公認心理師に対応したカリキュラムを設定するとともに、公認心理師心理実践実習費を制定した。</li><li>5. 大学院 教職課程再課程認定申請について協議し、2018 年度・2019 年度の担当教員を選出した。</li><li>6. 外国人研究者としてビーレフェルト大学の Amrhein Bettina 教授を招聘し「国際的視野からのインクルーシブ教育」に関する講義を担当いただいた。</li><li>7. ディプロマ・ポリシー、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシーについて協議し、改訂した。</li><li>8. 2015 年度に受審した大学基準協会による認証評価において「努力課題」とされていた課程博士の取扱いについて協議し、学位授与までの在籍関係を保つことを基本方針とし、それに伴い、留年時に納入する学費について検討・決定した。</li><li>9. 博士課程の学位論文審査をめぐる諸課題について協議し、予備審査手数料の設定、学位論文審査手当の分割支給、論文博士の予備審査申請期限の変更、研究業績目録・履歴書様式の変更等について決定した。</li><li>10. 視覚障がい院生へのサポート体制について、アクセシビリティ支援室と連携しつつ、当該院生への学修上の合理的配慮事項について検討し、科目担当教員への周知を図った。</li><li>11. これまで具体的な検討がなされてこなかった博士論文構想発表会について、その教育的意義と実施方法について協議し、合意を得ることができた。</li></ol>

	12. (株)札幌副都心開発公社および厚別区長からの意見書によって、社会福祉学研究科の教育課程が、学位授与方針に沿った編成となっていることを確認することができた。
次年度への課題	<p>1. 大学院志願者の確保に関わる方策を検討する。</p> <p>2. 修士・博士課程の指導体制の充実・強化を図る。</p> <p>3. 公認心理師カリキュラムの円滑な導入・展開を図る。</p> <p>4. 引き続き、魅力ある大学院づくりに取組んでいく。</p>
自己点検評価委員会からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・認証評価に係るカリキュラム・ポリシーの改善を中心に、3ポリシーの検討・修正及び公認心理師、認定社会福祉士など、資格に関連する対応に取組んだことを評価する。</li> <li>・博士課程において、課程博士の取扱い、学院論文審査の取扱い及び学位論文構想発表会の検討など、諸課題の検討に取り組んだことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられているが、公認心理師カリキュラムの導入に遺漏なく取組むこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 4. 文学部【報告者：学部長 蓑内 豊】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	1. 2019年度カリキュラム改編の確定
取組の結果と 点検評価	<p>1. 2019年度カリキュラム改編の確定</p> <p>2019年度から開始予定のカリキュラムについて検討し、確定させた。英文学科では「文化・文学」「言語・コミュニケーション」「グローバル・スタディーズ」の3コース、心理・応用コミュニケーション学科では「人間科学」「地域・国際」の2コースを設けることとした。</p> <p>2. 外部評価</p> <p>㈱札幌副都心開発公社、および、札幌市厚別区による外部評価により、学位授与方針に役立つ課程編成、実践力が高く国際性豊かな人材育成、コミュニケーション能力を養成する実習の質の高さなどについて高い評価を受けた。</p> <p>3. その他</p> <p>心理・応用コミュニケーション学科1名の採用人事を計画通り行うことができた。新しく助教（学習サポートセンター）1名を新規採用できた。が、英文学科（特別専任教員）1名は公募したものの適任者を得ることができなかつた。</p> <p>今年度も、北星学園大学英文学科卒英語教員研究協議会（略称：北星英研3月3日）、心コミ・ラウンド テーブル（3月10日）、北星ドキュメンタリー映像祭（12月16日）の学部関連行事を開催した。また、特別専任教員懇談会（3月13日）を開催し情報交換を行った。</p>
次年度への課題	1. 将来的な学部学科の在り方について学部としての検討
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英文学科（特別専任教員）の採用人事について遗漏なく行うこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 5. 文学部 英文学科【報告者：学科長 長谷川 典子】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。  
「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
A	A	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
A	A	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
A	A	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p>【努力課題】 ・該当なし。</p> <p>【改善勧告】 ・該当なし。</p>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"><li>新カリキュラム導入に向けた検討（継続） 今年度は教職課程の再課程認定審査に向け、教職関係科目群の更なる検討を行った。学科会議および検討委員会での議論を重ね、1月末に最終カリキュラム案の提出に漕ぎ着けた。来年度は、新カリキュラム導入前年となるため、実際の展開に向けて更なる検討を進めたい。</li><li>ケンブリッジ英検等、学習到達度計測方法の検討 英文学科学生の英語力測定に使用している TOEFL については、英文学科 FD を開催し、学科が独自に作成を依頼した、分析用ソフトの使用法についての講習を受け、使用法を全員で確認し、その後ソフトウェア改善のための議論を重ねた。また、TOEIC・ケンブリッジ英検については、試験的に一部の学生の受験データを分析し、TOEFL との相関等について検討を行った。次年度に向け、蓄積されたデータについてさらなる分析を進め、当学科の学生の英語力計測・評価において最適な方法の策定を目指したい。</li><li>英語4技能資格・検定試験の入試への導入可能性の検討 FD を開催し、4技能入試の対象となる TOEIC S&amp;W・TOEFL iBT・GTEC・英検の4種類の内、一般的に最も多くの高校生が利用することが想定されている GTEC を取り上げ、他試験との相関や、受験生全体データの分布予想などについて検討した。来年度は、入試への導入に向けた議論を継続し、本学科において適切な導入方法や配点の決定につなげたい。</li><li>留学経験者の積極的活用策の検討 5月、7月の2回、学科主催のワーキングホリデー説明会を開催した。オーストラリアやカナダへの滞在経験のある学生が主体となり企画されたセミナー形式の会は、学生たちが海外に目を向ける契機となり、さらに学年の垣根を超えたつながりをもたらすなど、学生間のコミュニケーションの促進にも繋がった。また、留学経験者の学生たちが中心となり、本学科のロバート・トムソン専任講師を講師とした「世界一周セミナー」も7月に開催された。後輩、友人などに海外での貴重な経験を伝え、誘うという流れが自然に醸成されてきており、今後もこのような活発な学生主導の活動が進められるよう、学科としてもバックアップ体制</li></ol>
取組の結果と点検評価	

	を整えたい。
次年度への課題	1. 新カリキュラム導入に向けた検討（継続） 2. ケンブリッジ英検等、学習到達度計測方法の検討 3. 英語4技能資格・検定試験の入試への導入可能性の検討
自己点検評価委員会からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ケンブリッジ英検等の外部試験を利用した、学習到達度計測方法及び入学試験への導入に向けた検討に着手したことを評価する。</li> <li>・留学・海外体験のある学生による説明会等を開催し、他の学生にグローバルな視野を持たせたことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2018年度においても引き続き、留学・海外体験のある学生による説明会等を実施すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 6. 文学部 心理・応用コミュニケーション学科【報告者：学科長 田辺 毅彦】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。

「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
B	A	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
A	A	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
A	A	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・北星ドキュメンタリー映像祭のありかたについて整理・検討すること</li> <li>・ディプロマ・ポリシーに基づく自己評価が「B」となっているので、該当する事項について改善に取組むこと。</li> </ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 一般入試・推薦入試の志願者を増加させる方策の検討と実施の方策を考える。</li> <li>2. 就職支援の対策を継続し、強化していく。</li> <li>3. 語学検定認定の単位の修得を促す方策及び修学困難学生への支援策を検討する。</li> <li>4. 「北星ドキュメンタリー映像祭」の開催および結果の周知方法を検討する。</li> <li>5. 2019年度新カリキュラムおよび教職課程再課程認定の更なる検討を行う。</li> <li>6. 学外組織と連携した学科活動の可能性を探り、卒業生の組織化を検討する。</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. これまで同様、一般入試・推薦入試の志願者増加の方策として、「積極的に出張講義に出かける」、「学科HPで学科内情報を積極的に発信する」などの方策を継続して行ったが、今年は、センター利用入試は若干増加したもの、一般入試は約30名減となったため、入試課にも協力を求め、情報共有をしながら原因分析を行い、次年度の戦略を立てる必要がある。</li> <li>2. 就職支援対策については、例年のように、前期末に学科の就活支援集会を実施し、3年生全員を対象に、就職支援課の職員の方からのアドバイス、内定を獲得した4年生の体験談などを行った。加えて、ゼミごとの就職支援課による就職指導も強化している。</li> <li>3. 検定認定の単位の修得方策では、昨年に引き続き、検定試験一覧の作成と周知、入学前教育への導入などに取組み、加えて、本学科ピアソーターによる指導機会（学習ソポーターセンター主催）も活用した。そして、昨年に引き続き、前後期1回ずつ、漢検と日本語検定の学内開催を行った。次年度以降も、早め修得の周知や、修得科目の順番（外国語取得を早めに行うなど）指導など、更なる、継続的な対策を継続する必要がある。また、修学困難学生への支援策としては、支援を要する学生について、学科内で情報を共有するのみならず、アクセシビリティ支援室とも連携を強めているが、発達障がいの可能性の高いと思われる学生に関しては、学科FDを開いて検討を行ったが、決定的な解決策は見いだされず、相關わらず授業指導において苦戦を続けており、次年度も試行錯誤が続くと思われる。</li> <li>4. 今年度も、阪井・大島教授を中心に、高校生を対象にした映像作品の募集対策イベント「北星ドキュメンタリー映像祭」として12/16に開催された。当日は、道内高校の放送局担当者や、映像関連事業担当者、新聞・放送局の担当者等だけでなく、多数の高校生が参加したが、本学学生や学外一般向けの周知や参加が未だに課題である。また、経済的にも、外部の助成金を利用して賄ったが、今後の経済的な見通しが十分でなく、安定的な開催を続けるための</li> </ol>

	<p>方策については、更に検討していく必要がある。</p> <p>5. 2019年度の新カリキュラムについては、石川准教授を中心としたワーキンググループによる案を基にしてほぼ完成した。内容的には、従来の教育体制をより精緻に、効果的に行うようカリキュラム構成の強化が行われる予定で、学科内のコースも、人間科学、地域・国際の2つに再編される見通しである。今後は、さらに、細かな授業内容の検討、実際の授業シミュレーション、新任教員のカリキュラム負担などの内容検討などが課題として残っている。</p> <p>6. 例年通り、卒業生・在学生・スタッフをつなぐ、心コミ・ラウンドテーブル 2018 を3月10日に開催した。それでも、卒業生への周知や情報提供が年々、困難になってきており、その連絡方法について今後も検討する必要がある。また、非常勤講師・臨時講師を招き、学科教育について点検・検討する学外協力者懇談会を1月27日に実施したが、予算の削減が進む中で、懇親会などの規模縮小が必要であると思われる。</p>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 一般入試・推薦入試の志願者を増加させる方策の検討と実施の方策を考える。</li> <li>2. 就職支援の対策を継続し、強化していく。</li> <li>3. 語学検定認定の単位の修得を促す方策及び修学困難学生への支援策を検討する。</li> <li>4. 「北星ドキュメンタリー映画祭」の継続的な開催および結果の周知方法を検討する。</li> <li>5. 2019年度新カリキュラムの更なる検討（特に、新任教員の役割の明確化）を行う。</li> <li>6. 学外組織と連携した学科活動の可能性を探り、卒業生の組織化を検討する。併せて、新カリキュラムへの移行に関する問題点を検討する。</li> <li>7. 公認心理師資格取得の体制作りを、該当する学生に向けて整備する。</li> </ol>
自己点検 評価委員会から の評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・就職支援策、検定認定対策、発達障がいと思われる学生への対応など、学生支援に注力したことを見た。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・公認心理師資格取得の体制作りについては、社会福祉学部福祉心理学科及び教学会議等での検討や担当事務との連絡調整など、必要な手続き等を踏まえた上で整備を進めること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 7. 経済学部【報告者：学部長 原島 正衛】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・経済法学科の採用人事の混乱の経緯等について学長に報告すること。</li> <li>・経済学部研究資料室の取扱いについて検討を進めること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学部レベルでの研究活動の活性化のために、研究会を組織化するなどの取組みの活性化する。</li> <li>2. 「学部学科再編」議論が学長特別補佐の下で行われることとなる。大学全体、経済学部の将来にも大きな影響を与えるものであり、議論を見守るだけではなく、経済学部として具体的な議論、発言、提言を行い、経済学部の将来を考える。</li> <li>3. 経済学科及び経済法学科が先行する新カリキュラムの速やかな実施を支え、学生のニーズにあった十全な実施の実現を目指す。</li> <li>4. 経済学部資料室のより有効な利用方法を考える。</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研究の組織化は行うことができなかった。次年度の「学部教育・研究の国際化」の枠組みで取組みたい。</li> <li>2. 学部学科再編に関する経済学部からの提言等に関しては、期待した「ワーキング・グループ」の設立も行われず、意見を聴取される枠組みも設定されなかつた事は大変残念であった。従って、入試倍率での調整といった一部の動きを除き、学部レベルで議論・提言などを行うことができなかつた。次年度の全学レベルでの提言・展開に期待したい。</li> <li>3. 経済学部の新カリキュラムの策定は順調に行われ、経済学科、経済法学科は 2018 年度より、経営情報学科は 2019 年度より実施されることとなつた。</li> <li>4. 経済学部研究資料室の活用に関しては、予算上の課題もあり、継続審議となつてゐる。</li> <li>5. 経済法学科の人事に関しては、学長との相談・了承の上を行つており、「混乱」はなかつたものと考えている。</li> <li>6. (株) 札幌副都心開発公社から、一定の評価を受けた。</li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 全学的な学部学科再編の動きに応じて、臨機応変に対応する。</li> <li>2. 「学部教育・研究の国際化事業」を円滑に進める。</li> <li>3. 新カリキュラムのスタートに伴い、教学・学生の指導面等に関し、教員と事務組織が連携・協議を密にし、状況に対応した枠組みをつくる。</li> <li>4. 道内経済界・自治体等との関係を密にし、経済学部全体としての地域での存在感を高める方策を模索する。</li> </ol>
自己点検評価委員会からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「学部教育・研究の国際化」に着手したことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「学部教育・研究の国際化」を実施するにあたり、教員と事務組織が連携・協議を密にし、計画に基づいて実施すること。</li> <li>・経済学部研究資料室の取扱いについては、2013 年度に運営・財務点検委員会からの指摘を受け、2015 年度に企画運営会議からその存廃も含めて検討依頼をしているが、未だ回答がないので早急に回答すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 8. 経済学部 経済学科【報告者：学科長 中村 一浩】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。

「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
A	S	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
A	S	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
A	S	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本年度の課題に「学科の魅力の対外的な発信」が挙げられているものの、それに対する具体的な取組みが記載されていない。次年度への課題にも挙げているので遗漏なく取組むこと。</li> </ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>新カリ移行過程の様々な準備の中で、基礎学力の更なる底上げと知的好奇心の喚起を図る途を更に模索し続け、様々なアイデアを着実に実行してゆくこと（過年度よりの継続課題）。</li> <li>一般入試の実質競争倍率2倍超を恒常的に維持できることを目指した、学科の魅力の対外発信の更なる積極的展開（同上）。</li> <li>学科教員による就職指導の深化と就職実績の向上（同上）。</li> <li>国際性を核とする学科教育の充実の為の諸施策の検討。</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>「新聞活用」、「演習」等を基幹とする少人数教育により、基礎学力の底上げは進んでいるが、学力格差も顕在化しつつあり、より大きな「刺激」を与えつつこれを推進してゆかねばならない。</li> <li>新年度からのカリキュラムの全面的な見直しを受験生向けに積極的且つ印象的にアピールしたことが好感されたのか、受験生の反応は良好であり、実質倍率2.5倍を記録し、目標をクリアできた。</li> <li>平成バブル期以来の追い風を受けつつ、まずはまずの就職実績を民間企業及び公務員受験の両分野であげた（とりわけ後者）ものの、今一つという印象も残る。教員各位の一層の熱意が望まれる。</li> <li>他学科に先駆けて新カリキュラムの策定を実現した。学科会議及び学科FDに於て度々英語力涵養を始めとする国際化への具体的な対応を協議し、検定試験受検の義務付けや海外インターンシップ奨励などの（当学科としての）新機軸を導入することになった。これにより当学科は、名称こそ従来のままであるものの、実質的には「国際政経学科」への質的な変身が実現される運びとなったのは誠に画期的なことである。</li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>新カリキュラムのコアをなす「国際人」養成の為の英語教育を初年度から円滑に実施し、新入生の知的環境への包摂を強力に進めてゆくこと。</li> <li>一新された学科の特色を対外的により積極的にアピールし、認知度を高めて、国際性に大きな関心を寄せる受験生達のニーズを引き続き受け止められるように鋭意努めること。</li> <li>就職支援課と協力しつつ、個々の学生のニーズに適合する進路の確保に努め、より高い進路決定率を実現すること。</li> </ol>

自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・英語力涵養を始めとする国際化への具体的な対応を協議したことは、経済学部で掲げる「学部教育・研究の国際化」ともリンクしており、評価できる。</li></ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・新カリキュラムへの対応を遗漏なく行うこと。</li></ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・該当なし。</li></ul>
------------------------	---

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 9. 経済学部 経営情報学科【報告者：学科長 西脇 隆二】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。

「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
A	A	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
S	S	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
A	A	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・担任制に係る点検評価を行うこと。</li> </ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>新カリキュラムを完成させること。</li> <li>受験生にとって魅力ある学科づくりについて検討すること。</li> <li>「担任制」の効果的な運営を図ること。</li> <li>「履修モデル」の改良を検討すること。</li> <li>学科設立 30 周年の資料をアーカイブすること。</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>カリキュラムマップやナンバリングなどを除き、2019 年度スタートの新カリキュラムをほぼ完成させることができた。</li> <li>新カリキュラム検討や学科 FD などにおいて議論した。その結果、新カリキュラムでは「ビジネスと社会」あるいは「プロダクトデザイン」などを新設し、本学科の魅力である実践的な学びをさらにアピールできる内容になった。また学科 PR についても HP のアクセス解析を実施して、学科ホームページや学科パンフをより魅力的なものに改善していくことなどを決定した。</li> <li>「担任制」の実施については、授業内の周知を行い、また年間を通じて担当表を経済学部の掲示板にて掲示をした。結果として一定の効果はあったものの、十分に活用されるには至らなかった。十分に利用されない理由について探るため、年度末の授業で 1 年生に向けた担任制についてのアンケートを実施したところ、まだこの制度が十分に認知されていないことが分かった。また担任別に集まる機会が欲しい、悩みがないか担任からメールを送って欲しい、などの意見があり、今後の検討課題となった。</li> <li>2019 年度新カリキュラムに合わせて新しい「履修モデル」を決定した。特に現行の 12 のモデルに加え、「アントレプレナー及び CIO, CISO」履修モデルを新たに設けて 13 のモデルにし、時代の変化により対応できるモデルとなった。</li> <li>学科設立 30 周年アーカイブは原稿が整い、今年度内に電子ファイルとして完成できる見込みとなった。</li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>新カリキュラムの円滑な開始に向けた準備。</li> <li>学科 PR 改善方法の検討。</li> <li>「担任制」をより実効性のあるものにすること。</li> <li>学科設立 30 周年アーカイブの利用についての検討。</li> <li>2018 年度経営情報学科の担当となる「大学公開講座」の企画と実施。</li> </ol>

自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・担任制を導入し、それに係る点検を実施したことを評価する。</li></ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・次年度への課題に挙げられているが、「担任制」をより実効性のあるものにすること。</li></ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・該当なし。</li></ul>
------------------------	---

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 10. 経済学部 経済法学科【報告者：学科長 秋森 弘】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。

「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
S	A	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
S	A	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
S	A	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>修学記録に係る点検評価を行うこと。</li> </ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>2018 年度学科新カリキュラムに付随する修学記録（履修指導）を 2017 年度から先行試行し、書式と運営の詳細を確定していく。</li> <li>2018 年度学科新カリキュラムについて広報活動を行う。</li> <li>2018 年度学科新カリキュラムについてコースガイドを作成する。</li> <li>2019 年度開始となる言語教育部門および共通科目部門の新カリキュラムと、2018 年度学科新カリキュラムとの接続を円滑に行えるよう、必要に応じ配慮していく。</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>2017 年 10 月～11 月に教員が手分けして全 1 年生と面談、その内容を踏まえ 12 月に次年度からの修学記録（履修指導）本格運用の方法と書式を検討した。</li> <li>転コースが可能な 5 コース制を次年度から実施することとした。</li> <li>学科パンフレット作成、キャンパス説明会などの機会に新カリキュラムの広報を行ったが、十分とは言えなかつたので次年度はさらに力を入れる。</li> <li>コースガイドを作成した（次年度 4 月、新入生に配布予定）。</li> <li>共通科目部門の 2019 年度新カリキュラムから、4 単位分の必修指定を外すことにより、学科専門科目と共通部門科目との時間割上の衝突頻度を下げ、学生が円滑に科目選択できるよう配慮した。</li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>退職教員の補充</li> <li>開始初年度の新カリキュラムについての適切な運営</li> <li>新カリキュラム開始に伴い、新入生オリエンテーションで実施しているアンケート内容の見直しと分析</li> </ol>
自己点検評価委員会からの評価	<p>【評価点】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>修学記録作成のため、全 1 年生と面談し本格運用の方法と書式を検討したことを評価する。</li> </ul> <p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>次年度への課題に挙げられているが、新カリキュラムへの対応を遺漏なく行うこと。</li> </ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 11. 社会福祉学部【報告者：学部長 田中 耕一郎】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域社会貢献事業の枠が残ってしまったのは残念であった。テーマ設定などの見直しに努めること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学部の将来を見据えつつ、引き続き魅力ある学部づくりに取組んでいく。</li> <li>2. 地域貢献事業等を通した地域貢献・社会連携の更なる展開を図っていく。</li> <li>3. 学部学科再編に係る学部内議論を活性化していく。</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 次年度から福祉心理学科における公認心理師養成が開始されるが、これをもって国試対策は三学科に共通の課題となる。そこで、今年度は 12 月 6 日に「社会福祉学部における国家試験対策について」と題して学部 FD を開催し、これまで社会福祉士・精神保健福祉士国家試験対策を担っていただいた畠准教授、伊藤准教授から、国試対策の経緯と現状、および課題についてご報告をいただき、本学部における国家試験対策の展望について検討した。</li> <li>2. 今年度も就職支援課および社会連携課との連携のもと、社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験対策講座や模擬試験を実施することができた。</li> <li>3. 社会福祉学部地域社会貢献事業は、第一次から第三次募集のすべての枠に応募があり、道内 18 か所に 9 名の学部教員が派遣された。</li> <li>4. 例年通り、e ラーニング科目担当者に対してアンケート調査を実施し、その結果、概ね例年と変わらず展開できたことを確認することができたが、展開上の課題も幾つか浮かび上がってきた。今後もオンデマンド教育の利点を最大限に活かせるよう、引き続き検討を重ねてゆきたい。</li> <li>5. 学部学科再編をめぐる社会福祉学部提案の協議のため、福祉計画学科・福祉臨床学科合同 WG を設置し検討いただいた。また、6 月 28 日には学部リトリートにおいて WG から提案いただいた学部学科再編案を協議し、さらに 7 月 5 日の第 5 回教授会において、社会福祉学部提案を議決し、学長・学長特別補佐に上申した。</li> <li>6. 11 月 4 日・5 日に日本ソーシャルワーク教育学校連盟主催の第 47 回全国社会福祉教育セミナーの開催校として、社会福祉学部教員によって実行委員会の役割を担い、全国から 230 名の参加を得て、有益な意見交換・情報交流の機会となった。</li> <li>7. 新規採用人事として、特別専任教員 2 名、助教 1 名を採用することができた。また、昇格人事としては、准教授 3 名の教授昇格が承認された。</li> <li>8. 札幌副都心開発公社、及び厚別区長からの意見書によって、社会福祉学部の教育課程編成が、学位授与方針である現代社会において必要とされ貢献できる人材育成につながる課程であることが確認された。</li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学部の将来を見据えつつ、引き続き魅力ある学部づくりに取組んでいく。</li> <li>2. 地域貢献事業等を通した地域貢献・社会連携の更なる展開を図っていく。</li> <li>3. 社会福祉学部における国家試験対策の位置づけを明確化し、その展望を図る。</li> </ol>
自己点検評価委員会からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学部における国家試験対策の展望を検討したことを評価する。</li> <li>・地域社会貢献事業の枠に全て応募があり、各地域・社会に貢献したことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新設された国家資格である、公認心理師養成課程対応に遺漏なく取組むこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 12. 社会福祉学部 福祉計画学科【報告者：学科長 岡田 直人】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。

「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
A	A	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
A	A	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
A	A	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題にもあるが、学生から聴取した意見を学科運営などに反映すること。</li> </ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2018 年度入試に向けて、引き続き、受験者確保に向けて、学科教員が出張講義、キャンパス説明会、学部地域社会貢献事業、学科公開講座、学科ホームページおよび学科サブパンフレットを通じて、積極的に学科の PR を図りたい。</li> <li>2. コミュニティワーク実習、社会福祉調査実習、福祉計画インターンシップおよび学部地域社会貢献事業などを通じて、引き続き地域・行政との連携の強化に努める。</li> <li>3. 学科研究会等を努めて開催し、学科教員の教育・研究の質の向上に努める。</li> <li>4. 「学生と教員の懇談会」「新入生アンケート」で、引き続き、志願動向、学科への要求などを把握し、それを学生募集、学生対応および学科運営に反映させる。</li> <li>5. 学科リトリート等を通じて、福祉計画学科の今後のあり方等について議論を行う。</li> <li>6. キャンパス・ハラスメント発生防止のため、関連する FD や研修会に積極的に参加し、早期発見・対応のために学生が相談しやすいような学科教員との関係ができるように努める。</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2018 年度入試では、推薦入試 4 名減の 45 名、一般入試 8 名減の 101 名、センター利用入試 4 名減の 91 名となった。大幅な減少とならなかつたが、全体で 16 名減となつた。かつて隔年毎に大きく増減した志願者数だが、推薦入試および一般入試の志願者数は近年安定している。今日、全国的に福祉系大学の志願者が低迷するなか、学科の特色が受験生に一定の評価を得られているものと感じる。PR 活動では、キャンパス説明会（3回）、高校出張等講義（14 回）、学部地域社会貢献事業（8箇所：音更町、由仁町、八雲町、滝上町、札幌市②、むかわ町、標茶町）、学科サブガイドブック・HP 一部改訂、厚別区版大学連携 CCRC 事業等で受験者だけでなく福祉専門職や地域住民への PR に努めた。学科公開講座は、希望した講師との日程調整ができず、今年度は見送り、次年度に改めて再交渉することとなつた。</li> <li>2. コミュニティワーク実習では、歌志内市保健福祉課長や札幌市厚別区もみじ台まちづくりセンター、厚別西まちづくりセンター所長等から講義および当該地域でのフィールドワーク前に現地でレクチャーを受けるなど、講義とフィールドワークの組み立てで地域のアセスメント、課題の確認作業を進めた。歌志内市のフィールドワークでは、社会福祉協議会、地域おこし協力隊員等から地域の課題について、厚別西地区では、町内会・自治会役員、老人クラブ、福祉のまち推進センター、民生委員などの関係者に地域づくりの取組みについてインタビューを行つた。また、講義最終日には関係者の参加を求めて厚別西地区のまちづくりに関する発表会を実施し質疑と討論を行つた。また、歌志内市民祭、光生舎ゆいま～るもみじ台夏祭り、厚別区民まつり等に学生ボランティアとして参加し、自治会役員等をはじめ、地</li> </ol>

	<p>域の方々と交流を行つた。社会福祉調査実習（履修者1名）においては、担当者がサバティカルのために、年度を通じて担当できなかつたために、昨年度に続いて、札幌学院大学「量的調査演習」との共同調査を行つた。札幌市豊平区住民を対象とする郵送法の調査であったが、これに対して、地域特性などを勘案し調査デザイン項目を考え、そのデータ分析を行い、報告書にまとめた。今年度、過年度履修生から、4人の社会調査士を輩出することができた。</p> <p>3. 学科研究会は企画しないかわり、学科FDを2回開催した。1回目はビーレフェルド大学教育学部（ドイツ）アムライン・ベティーナ教授から「インクルージョン教育を国際的観点から考える」（7/19）と題して、ドイツのインクルージョン教育を中心に、その理念を実現させる過程で何がうまくいき、どういう問題が生じているかご講演いただいた。2回目は立教大学コミュニティ福祉学部木下武徳教授から「体験型学習展開上の工夫と課題－立教大学における取組み事例からー」（11/1）と題して、本学福祉計画学科で「コミュニティワーク実習」「海外福祉計画実習」「社会福祉士養成」に関わった経験がある講師から、立教大学コミュニティ福祉学部で展開されている体験型学習「立教サービスラーニング」「東日本震災復興支援プロジェクト」「異文化スタディ（全学生が海外に行く）」「インターンシップ」「フィールドスタディ」「コミュニティスタディ」「ゼミ合宿」について、福祉計画学科と比較した上で、双方の良さと課題についてご意見をいただき、福祉計画学科における体験型学習を今後展開する上で参考となった。</p> <p>4. 「新入生アンケート（4/10）」を実施し集計した。結果（回答者84名）からは、福祉（53.6%）以外で魅力を感じていることは「就職内定率が高い（48.8%、昨年比16.6p↑）」「4年間で進路が考えられる（45.2%、同20p↑）」「複数の体験型・参加型授業（44.0%、同11.3p↑）」「公務員合格者が多い（40.5%、同17.2p↑）」、入学の決め手は「卒後の進路に期待が持てた（25.0%）」「明確に学びたいものがある（21.4%）」「総合的に魅力を感じた（20.2%）」であった。本学科を知るきっかけは「高校の先生の紹介（35.7%、同23.1p↑）」となっており、高大連携プログラム等の学外での出張講義の機会に、進路指導担当教員等の高校の先生に本学科を知つてもらうことに今後も力を入れていく必要があろう。「学生と教員の懇談会（7/13：参加学生31名）」では、教員に意見が言え、先輩や他の学生の話を聞く機会が持てたことを評価する発言が共通して多かった。</p> <p>5. 学科リトリートを2回（4/26、7/5）開催し、2学科（福祉計画学科、福祉臨床学科）の今後のあり方について検討した。また、学部リトリート（6/28）では、学部全体でこの件について検討した。</p> <p>6. 北星学園研修会（7/22）への参加および（前掲）「学生と教員の懇談会」の開催を通じて、学生の理解を深めることでキャンパス・ハラスメント発生防止に寄与していると判断する。</p>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2019年度入試に向けて、引き続き、受験者確保に向けて、学科教員が出張講義、キャンパス説明会、学部地域社会貢献事業、学科公開講座、学科ホームページおよび学科サブガイドブックを通じて、積極的に学科のPRを図りたい。</li> <li>2. コミュニティワーク実習、社会福祉調査実習、福祉計画インターンシップおよび学部地域社会貢献事業などを通じて、引き続き地域・行政との連携の強化に努める。</li> <li>3. 学科研究会等を努めて開催し、学科教員の教育・研究の質の向上に努める。</li> <li>4. 「学生と教員の懇談会」で、引き続き、志願動向、学科への要求などを把握し、それを学生募集、学生対応および学科運営に反映させる。</li> <li>5. キャンパス・ハラスメント発生防止のため、関連するFDや研修会に積極的に参加し、早期発見・対応のために学生が相談しやすいような学科教員との関係ができるように努める。</li> </ol>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャンパス説明会、出張講義、学部地域社会貢献事業等、学科PR活動に積極的に取組んだことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生から聴取した意見をどのように学科運営に反映しているか、具体的に記載すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 13. 社会福祉学部 福祉臨床学科【報告者：学科長 栗山 隆】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。

「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
A	A	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
A	A	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
A	A	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学科ホームページを改訂したとあるが、未だに学科長が前任者のままであるので、早急に対応すること。</li> </ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 入学志願者の安定的な確保に向けて、魅力的なカリキュラムの策定に着手する。</li> <li>2. 卒業時に求められる学生の資質について確認するとともに、それに必要な就職支援のあり方についての具体的な検討を行う。また国家試験の合格率維持・向上に向けた組織的な対応方法について検討する。</li> <li>3. 学生の主体的な大学生活を促し、学業に対する意識を向上させるための教育方法についての検討と取組みを行う。</li> <li>4. 障がいのある学生への支援について、学外における実習教育の展開を含め、障がいの種別を問わず着実に実施するよう更なる展開を図る。</li> <li>5. 教育・研究活動の充実と質の向上に向けて、公開研究会や学科公開講座の実施など、継続的な取組みを行う。</li> <li>6. カリキュラム改編の準備を行う中で、学科の将来構想とそれへの取組みについて検討を進める。</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 入学志願者の安定的な確保に向けて、魅力的なカリキュラムの策定に着手する。 継続的にカリキュラムの課題点を整理している。魅力的なカリキュラムの策定に着手すべく 2019 年度カリキュラム改定に向けた検討を行った。 入学志願者の安定的確保に対する対策に向けては、学科ホームページを改訂し Facebook を開設する中で、高校生を対象に学科教員が執筆するコラム欄や在校生、卒業生の状況等を掲載することにより受験生の関心を惹くための試みを行った。</li> <li>2. 卒業時に求められる学生の資質について確認するとともに、それに必要な就職支援のあり方についての具体的な検討を行う。また国家試験の合格率維持・向上に向けた組織的な対応方法について検討する。 就職支援のあり方については、学科会議のなかで検討の機会を設け対策を検討することになっていたが、具体的な方法を提案するまでには至らなかった。次年度の継続課題である。国家試験の合格率維持・向上に向けた組織的な対応方法については、昨年、全日北星を会場とした講座開講と出席しやすい日程調整、講師の質の均一化・向上、効率的なカリキュラム構成、受講料の軽減、サービスの向上等を勘案し受講講座の委託先を変更した効果が出始めている。また、国家試験対策として説明会や講座等を実施した。また、学科教員による個別の学習支援を継続して実施しており、学生の取組みを促すことができた。</li> </ol>

	<p>3. 学生の主体的な大学生活を促し、学業に対する意識を向上させるための教育方法についての検討と取組みを行う。</p> <p>学生の主体的な大学生活を促し、学科のカリキュラムや講義・演習・実習などの内容や全学的な学修環境の課題など自由に意見交換をする機会として、「2017年度福祉臨床学科学生教員懇談会」を2018年1月10日に実施した。また、教育方法の充実に向けた検討としては、従来同様、諸資格科目の少人数教育の展開、学科外教員も含めた幅広い専門的知見の提供などができた。また、指導方法について工夫している点や課題などを共有し、次年度の授業展開に向けて意見交換を行うことができた。</p> <p>4. 障がいのある学生への支援について、学外における実習教育の展開を含め、障がいの種別を問わず着実に実施するよう更なる展開を図る。</p> <p>在籍する障がいのある学生への指導・支援はこれまで同様に継続して取組むことができた。学内の支援及び実習等学外における支援についても「アクセシビリティ支援室」と連携し対応していくことが次年度の課題である。</p> <p>5. 教育・研究活動の充実と質の向上に向けて、公開研究会や学科公開講座の実施など、継続的な取組みを行う。</p> <p>「学科公開研究会」を、2017年7月19日に中村和彦教授が（タイトル「アトランティック・カナダ、ハリファックス市での在外研究生活を終えて」）報告者となり実施した。2017年12月13日に福島順子特任教授が（タイトル「アルツハイマー型認知症の最近の話題」）報告者となり実施した。「学科公開講座」を、2017年10月30日にカナダからピーター・コール氏を招き（タイトル「子どもの学ぶ力と可能性を信じる教育 - カナダ・ノヴァスコシア州、特別支援学校の実践から学ぶ - 」）実施した。「学科FD」を、2018年3月2日に永井准教授・畠准教授が（テーマ：福祉臨床学科における社会福祉士・精神保健福祉士国家試験対策の現状と課題ー従来の取組みを通してー）報告者となり実施した。</p> <p>6. カリキュラム改編の準備を行う中で、学科の将来構想とそれへの取組みについて検討を進める。</p> <p>教授会でのリトリートにより、具体的な検討の機会を設けることができた。次期のカリキュラム改編に向けて、教職課程再課程認定に伴う科目や担当者の確認など、現行カリキュラムの課題点を個別に検討することに着手することができた。その結果、ソーシャルワーカー養成（教員も含む）を主流に、資格や教員を志望する学生に対しては修学指導を通して無理のない履修を徹底していくことが確認できた。なお、福祉臨床学科の特色を出すために福祉臨床基盤科目に「社会福祉の思想」、「福祉臨床基礎実習指導Ⅰ・Ⅱ」、「倫理学」の科目を新設したが、福祉士資格対応科目や教育臨床専門科目に関しては法改正が予定されており、更なる課題の整理、調整が必要である。</p> <p>7. 【努力課題】・学科ホームページを改訂したとあるが、未だに学科長が前任者のままであるので、早急に対応すること。</p> <p>この点については、すでに課題に対応し修正済みである。</p>
次年度への課題	<p>1. 入学志願者の安定的な確保に向けて、カリキュラムの改編に着手する。</p> <p>2. 卒業時に求められる学生の資質について確認するとともに、それに必要な就職支援の方についての具体的な検討を行う。また国家試験の合格率維持・向上に向けた組織的な対応方法について検討する。</p> <p>3. 学生の主体的な大学生活を促し、学業に対する意識を向上させるための教育方法についての検討と取組みを行う。</p> <p>4. 障がいのある学生への支援について、学外における実習教育の展開を含め、障がいの種別を問わず着実に実施するよう更なる展開を図る。</p> <p>5. 教育・研究活動の充実と質の向上に向けて、公開研究会や学科公開講座の実施など、継続的な取組みを行う。</p> <p>6. カリキュラム改編の準備を行う中で、学科の将来構想とそれへの取組みについて検討を進める。</p>

自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・教育・研究活動の充実と質の向上に向けて、積極的に公開研究会・学科公開講座の実施を行ったことを評価する。</li></ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・就職支援のあり方については2013年度から課題として挙げられているが、例年具体的な検討に着手されていないので、課題として取上げるのであれば、しっかりと取組むこと。</li></ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・該当なし。</li></ul>
------------------------	--

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 14. 社会福祉学部 福祉心理学科【報告者：学科長 田澤 安弘】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。

「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
A	A	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
A	A	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
A	A	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>公認心理師養成カリキュラムの作成に遺漏なく取組むこと。</li> </ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>公認心理師養成カリキュラムが関係省庁から発表され次第、速やかに新カリキュラムとポリシーを確定する。</li> <li>公認心理師養成にかかる学外実習の円滑な運営を目指して、臨床心理実習委員会（ワーキンググループ）を立ち上げ、新カリキュラム実施後の体制について検討を開始する。</li> <li>新入生及び在学生の学習意欲を高めるために、引き続きピア・サポーターの効果的な活用について模索する。</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>公認心理師養成カリキュラムが公表されたのは 2017 年 9 月であった。また、突然のことであったが、関係省庁への実習演習にかかる各種書類の提出締切りが 11 月に指定され、非常に慌ただしい中での作業となった。結果として新カリキュラムとポリシーが完成し、2018 年度から養成課程をスタートすることが可能となった。さらに、教育支援課と協力しながら、受験資格の経過措置に伴う在学生の単位振替について検討し、福祉心理学科の在学生を対象とする説明会を開催して受験資格に関する情報を提供した。</li> <li>ワーキンググループを立ち上げて、学外実習の体制について検討を加えた。検討された内容の一部は実習科目のシラバスに反映され、さらに実習指導教員の過重な負担が想定されることから実習助教の新規採用をしかるべき会議体に上申した。また、実習先の開拓のため、各施設を訪問する活動も行った。しかし、学外実習の具体的な体制についてはさらに検討を加える必要があり、今後も継続して議論することになった。</li> <li>昨年度に引き続き、ピア・サポーターと連携して新入生対象の学内オリエンテーションおよび宿泊オリエンテーションを行い、新入生の不安解消に向けたかかわりを持つことができた。また、次年度から実施される公認心理師受験資格対応のカリキュラムについてピア・サポーターと綿密な打ち合わせを行い、次年度オリエンテーションの準備を行うことができた。その他、ピア・サポーターが、3 年次以降所属することになる専門演習について 2 年生を対象とした説明会を開き、学習サポートセンターでは特に心理統計に関わる授業科目の学習に焦点を合わせたサポートを行うなど、僅かながら新しい試みが実現している。</li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>引き続き公認心理師養成にかかる学外実習の円滑な運営を目指して、新カリキュラム実施後の体制を整備していく。</li> <li>心身の障がいを抱えた学生に対して適切なオリエンテーションを行うとともに、1 年間を通じてアクセシビリティ支援室と連携しながら最適な学習環境を提供する。</li> <li>引き続き、新入生と在学生の学習意欲向上のためにピア・サポーターを効果的に活用する。</li> <li>入試全般に関して見直しを行い、学生募集の方法について検討を進める。</li> </ol>

自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・時間が限られた中、教育支援課と協力し 2018 年度から公認心理師養成課程をスタートできるように対応したことを評価する。</li></ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・次年度への課題に挙げられているが、入試全般に関して見直しを行い、学生募集の方法について検討を進めること。</li><li>・新カリキュラムへの対応を遗漏なく行うこと。</li></ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・該当なし。</li></ul>
------------------------	---

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 15. 短期大学部【報告者：学部長 竹村 雅史】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 適正な入学者数を得るために志願者の安定的な確保と優秀な学生の獲得を目指す。</li> <li>2. 2019 年度カリキュラム改編について、DP、CP、AP の一体性と、それに整合するカリキュラムを検討する。単位制度の実質化について点検と検討をする。</li> <li>3. 学生の進路指導を徹底し、各担当部署と連携して就職活動のサポート並びに編入学希望者への指導に努める。</li> <li>4. 認証評価（第三者評価）で指摘された事項の対策を討議し、解決することを目指す。学生による授業評価アンケートを毎年実施する仕方について検討し、PDCA サイクルの改善を図ることを目指す。学習成果について評価の仕方を検討する。更に、短期大学の一層のグローバル化についても検討する。</li> <li>5. 特別専任教育職員の制度について点検する。</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 18 歳人口減少期の 2018 年度問題を迎えるにあたり、入学生確保が難しい時代に、安定した適正な入学者数の確保はできる見込みである。3回開催されたキャンパス説明会を在学生の協力も得て、両学科の取組みを理解してもらい魅力ある短期大学としての本学への関心を高めよう努力した。</li> <li>2. 両学科とも 2019 年度カリキュラムの改編に向けて、3ポリシーに適合した改編作業に着手し、将来を見据えた設計ができた。特に外部機関の札幌市厚別区から評価された実践力を身に着けるカリキュラム編成と共に、社会に出てからの即戦力となる人材育成を期待されるべく、将来のニーズに沿ったものになった。</li> <li>3. 例年通り両学科ともに、学内推薦編入に関しては、北星学園大学との連携を密に保ちながら、希望通りの数に達した。学外、道外への大学編入へも担任・教育支援課を中心に指導がなされ、柔軟に対応ができた。就職に関しても、若干の出遅れがあったものの、ほぼ就職内定状況は例年並となった。</li> <li>4. 授業評価アンケートに関しては、今年度は大学と同一で実施した。ただ、隔年実施なので、認証評価（第三者評価）に耐えうるアンケート実施の整備と PDCA サイクルの検証は課題として残った。グローバル化に関しては、英文学科の提携先の海外大学との正式な覚え書きの整備が進んだ。</li> <li>5. 特別専任教育職員制度の実施が 1 年を経過し、両学科にそれぞれ 1 名配置になっているが、特段の問題点はなかった。</li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 適正な入学者数を得るために更なる志願者の安定的な確保</li> <li>2. 短大授業アンケートの実施とその活用</li> <li>3. 入学時の基礎学力調査（北星学園大学すでに実施済）の実施</li> </ol>
自己点検評価委員会からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・編入学を含め、適切に学生の進路支援を行ったことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられているが、授業評価アンケートと PDCA サイクルの検証を行うこと。</li> <li>・基礎学力調査の実施について検討すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 16. 短期大学部 英文学科【報告者：学科長 R. E. ゲティングス】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。

「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
S	S	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
S	S	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
S	S	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	【努力課題】 ・該当なし。 【改善勧告】 ・該当なし。
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>学科5カ年計画のワーキンググループ（新カリキュラムWG、入試WG、出口WG、国際WG）活動を継続する。</li> <li>2019年度の新カリキュラム（CEFRを意識した）について検討を図る。</li> <li>英語4技能の測定方法と4技能入試のあり方についてさらなる検討をすすめ、志願者数の拡大と入学生の質的向上を図る。</li> <li>卒業後の学生の多様な進路を支援する方法を探る。</li> <li>予算の適正化を更に継続して進める。</li> <li>国際教育センターとの連携と国際プログラム（ディズニーインターンシップを含む）の更なる充実を図る。</li> </ol>
取組の結果と 点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>日本英語検定協会主催英検優秀団体賞（短期大学の部）で文部科学大臣賞を受賞した。</li> <li>2017年度にも学科5カ年計画のワーキンググループ（新カリキュラムWG、入試WG、出口WG、国際WG）の継続をし、その活動を下記に記載する。</li> <li>2019年度の新カリキュラム（CEFRを意識した）について検討を図る。             <ol style="list-style-type: none"> <li>学生のニーズに合った学習の調査の結果、特にスタディスキルに関しては科目数を減らし、学習内容を強化する。スタディスキルI・IIはスタディスキルIに、スタディスキルIII・IVはスタディスキルIIに統合して、強化を図る。</li> <li>海外プログラムに参加する学生が日本文化などを英語で説明できる能力を身につけるため、Japan Studies I &amp; IIを導入する。</li> <li>卒業後、英語教育に携わりたい学生のニーズが増えたため、「英語教育入門I・II」を導入する。</li> <li>国際観光の発展により、北海道でも英語のガイドの需要が増え、このような仕事に興味を持つ学生が増えたため「通訳法III」を「Tour Guiding and Interpreting」に変更する。</li> </ol> </li> <li>英語4技能の測定方法と4技能入試のあり方についてさらなる検討をすすめ、志願者数の拡大と入学生の質的向上を図った。             <ol style="list-style-type: none"> <li>1年生全員がケンブリッジ英検を課程履修費で受験した。</li> <li>入試課との協力で19年度の入試計画案については策定した。自己推薦（英語4技能試験）と指定校推薦（English Skill Check）を導入する。</li> </ol> </li> <li>卒業後の学生の多様な進路を支援する方法を探る。             <ol style="list-style-type: none"> <li>学会イベントの向上と継続。本学後援会からの支援を受けて、卒業生と在学生が直接交流できるイベントを実施した。本年は昨年よりさらに多様な経験を持つ卒業生を招き、国内外</li> </ol> </li> </ol>

	<p>の様々な分野でのキャリアについての貴重な話を聞くことができた。</p> <p>(2) 留学前進路指導の継続。昨年同様就職支援課の協力を得て、留学予定の学生に対し休学期に留学前ガイダンスを実施した。</p> <p>(3) 航空業界就職を希望する学生支援。同業界を志望する学生数が多いため、元 CA の講師 2 名をお招きし、学科イベントの形で航空業界就職対策を目的としたセミナーを実施した。</p> <p>6. 予算の適正化を更に継続して進める。</p> <p>(1) 現代の学生のニーズに基づき、海外プログラムや試験の予算のために 2017 年度補正予算と 2018 年度当初予算を減らした。特に、2016 年度以前の学生に学科が実施していた TOEIC を課程履修費で支払われるケンブリッジ英検に取り替えることにより、予算を減らした。</p> <p>7. 国際教育センターとの連携と国際プログラム（ディズニーインターンシップを含む）の更なる充実を図る。</p> <p>(1) 海外プログラム、特に海外研修 A（学生個人留学）の運営のため教育支援課と国際課との協力を向上の一一致を継続する。</p> <p>(2) Valencia College（ディズニーインターンシップ）と国際交流協定(MOU)を行い、単位の変換も承認された。</p> <p>(3) 今まで関係していた 8 校の海外の大学と MOU を更新した。</p> <p>(4) 新しい大学 Birmingham City South College とも MOU を締結した。</p> <p>(5) 2018 年度の 6 月に短期大学部英文学科と Tourism Program, School of Arts Murdoch University, Australia が国際交流プログラムと MOU のために連携して、準備をする。そのオーストラリアの学生は北星の学生と国際文化交流、サステナブルツーリズム関係のグループプロジェクトや授業を訪問するなどを行う。</p> <p>(6) 今年度、約 30% の 1 年生が留学、ボランティア活動、インターンシップ、ワーキングホリデーなどの海外活動をした。</p>
次年度への課題	<p>1. 学科 5 カ年計画のワーキンググループ（新カリキュラム WG、入試 WG、出口 WG、国際 WG）活動を継続する。</p> <p>2. 2019 年度の新カリキュラム（CEFR を意識した）について検討を図る。</p> <p>3. 英語 4 技能の測定方法と 4 技能入試のあり方についてさらなる検討をすすめ、志願者数の拡大と入学生の質的向上を図る。</p> <p>4. 卒業後の学生の多様な進路を支援する方法を探る。</p> <p>5. 予算の適正化を更に継続して進める。</p> <p>6. 国際教育センターと連携し、大学部の海外プログラムに短大も正式に MOU を結び海外プログラムの充実を図る。</p>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>これまで交流していた海外大学と国際交流協定 (MOU) を整備し、さらに新規協定校及びプログラムを追加して学生の留学選択肢を増やしたことを評価する。</li> <li>英語 4 技能の測定方法と 4 技能入試のあり方について、検討をすすめたことを評価する。</li> <li>日本英語検定協会主催英検優秀団体賞（短期大学の部）で文部科学大臣賞を受賞したことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>該当なし。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 17. 短期大学部 生活創造学科【報告者：学科長 藤原 里佐】

#### ◎ 各ポリシーを踏まえた点検評価

どの程度ポリシーに基づいた活動が行われ、理念・目的・目標等が達成できたか、自己評価欄に記入してください。

「S：達成度が極めて高い」「A：ほぼ達成された」「B：やや不十分である」「C：不十分であり改善点が多い」

自己評価		ポリシー
前年度	今年度	
A	A	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を踏まえた点検評価
B	A	カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を踏まえた点検評価
A	A	アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）を踏まえた点検評価

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラム・ポリシーに基づく自己評価が「B」となっているので、該当する事項について改善に取組むこと。</li> </ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>2019 年度カリキュラム改編に向け、新設科目のねらい、概要、他の科目との関係性等について精査する。また、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーとの整合性を確認し、必要に応じて、3ポリシーの見直しを図る。</li> <li>入学者の生活基盤・条件が多様化する中で、学生との対話を重視し、一人一人が充実した学生生活を送ることができるよう、丁寧なかかわりと支援を行う。</li> <li>優秀な学生を安定的に確保するために、入試業務に対して全教員が協力して臨み、キャンパス説明会、小論文添削、入学前教育などの機会を活かす。</li> <li>早い段階から短期大学部卒業後の進路を学生と話し合い、就職、編入等の具体的な情報提供ができるよう、就職支援課、キャリアデザイン関連科目との連携を図る。</li> <li>学科教員の研究活動を推進する。</li> <li>学科 FD を通して学生理解、学生支援の力を高め、授業の向上につなげる。</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>学生の履修傾向や学びの系統性を踏まえ、現行カリキュラムの科目数、配当時期、3ポリシーとの整合性、履修モデル推奨科目の内容等を見直した。生活創造学科の学びに対して、学生がモチベーションを高め、2年間でバランスよく履修することができるよう、カリキュラム改編の方向性を定めることができた。</li> <li>修学や環境適応に不安を抱える学生の支援に関して、学科内で情報を共有すると共に、学内外の関係機関との連絡を密にし、多面的なサポートができるように努めた。学生支援全般において、担任制を活かし、問題の早期発見と、学生一人ひとりの状況に即したきめ細やかな対応を目指した。</li> <li>3回のキャンパス説明会では、学科の特性やカリキュラム展開を高校生に紹介できる有効な機会と位置付け、学科プログラム等の充実化に努めた。また、高校生との対話を通して、進路選択に際する受験生の意識やニーズを把握するよう心がけた。入試委員を中心に、入試に関わる業務を学科メンバーが協力して行い、推薦入試、一般入試共に、前年度以上の志願者を得ることができた。</li> <li>短大への進学目的や卒業後の進路選択に関して、自分を客観化し、学生生活の意義や目標を自立的に設定するよう働きかけた。就職活動に伴う相談、編入学に際する支援等も、関連する情報を学科全体で把握し、学生支援を円滑に行うことができた。</li> </ol>

	<p>5. 専任教員の退職人事に伴い心理学専門の教員が着任し、特別専任教員と合わせた体制となつた中で、各自が教育活動、公務分掌とのバランスを考慮しつつ研究活動を行い、その成果を出すために努力をした。科研の採択は代表が1件、分担が1件であり、本年度の申請は2件である。</p> <p>6. 学科FDを実施し、短大教育に対する学生ニーズの把握と、教育の質保証について、協議することができた。特に、履修モデル制による専門性の深化と、多様な科目を幅広く学ぶことの意味・方法を、学生に的確に伝える工夫が必要であることを確認した。授業の向上に関する取組みは、学科として、実践や検証の場を設けることができなかつたが、個別に検討し、授業改善を進めることができた。</p>
次年度への課題	<p>1. 2019年度新カリキュラムへの移行に向け、現行カリキュラムとの相違点をふまえ、学生への周知などを丁寧に行う。合わせて開講期の移動や履修登録数の上限変更を行うため、学生に混乱が生じないように留意する。</p> <p>2. 学科FDを通して学生理解、学生支援の力を高めると共に、講義の方法や形態、教授方法を点検し、授業改善・向上に取組む。</p> <p>3. 学生一人一人が充実した学生生活を送ることができるよう、担任制を活かし、適切なサポートを行う。また、その際には、学科会議等での情報共有を通して、組織的に対応できる態勢を整える。</p> <p>4. 入試業務に対して全教員が協力して臨み、キャンパス説明会、高大連携プログラム、小論文添削などの機会を活かして、志願者の確保につなげる。</p> <p>5. 短期大学部卒業後の進路に向け、就職、4年制大学への編入等に関する具体的な情報提供ができるよう、就職支援課、キャリアデザイン関連科目との連携を図る。</p> <p>6. 学科教員の研究活動を推進する。</p>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p>【評価点】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現行のカリキュラムを見直し、3ポリシーの見直しも含め 2019年度カリキュラム改編の方向性を定めたことを評価する。</li> </ul> <p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 18. 共通科目部門会議【報告者：部門長 宮崎 靖士】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・建学の精神の根幹を担うキリスト教科目の新任担当教員への引き継ぎを遺漏なく行うこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. クラス規模と時間割の適正化を図ること（継続）</li> <li>2. 授業内容の充実と学生の受講態度の改善を図ること（継続）</li> <li>3. 現行カリキュラムについて精査し、次期カリキュラムについて検討すること。（継続）特に、2019年からの新カリキュラムの具体的構築に取組むこと。</li> <li>4. FD の具体的な推進（継続）</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<p>・努力課題について</p> <p>共通科目部門会議における取組みとしては、現行カリキュラムの展開、および2019年度よりの新カリキュラムに関する検討に際して、折にふれ、キリスト教科目前任担当者と新任担当教員との間での意思疎通を心がけた。そしてその結果を、共通科目部門における意思決定に取り入れることを継続的に行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. クラス規模と時間割の適正化を図ること <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 2015年度より、履修希望者が250名を超えた講義については、講義担当者の意向も尊重しつつ抽選を行い、履修人数を適正化する努力を続けている。その一方で履修希望者が250名を超える講義数は、この3年間で増加を続けている。また、履修登録の締め切りから、履修希望者が250名を超えた講義の担当者へ抽選をするか否かの意思確認ができる期間も極めて短い。クラス規模の問題に関しては、関係各部署との連絡を密にしつつ、新カリキュラムの開始にむけて有効な方策を検討していくことが必要だと考える。</li> <li>(2) 時間割については、全学的な編成方針に従っているが、履修人数の非常に少ないクラスが時に発生している。この問題についても、関係各部署との連絡を密にしながら対応策の検討を続ける。</li> </ol> </li> <li>2. 授業内容の充実と学生の受講態度の改善を図ること <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 学生の受講態度については、部門会議に指摘や苦情は寄せられていない。これまで行われてきた私語対策等が効果を発揮しているものと考えられる。なお、授業中における電子機器の操作等に関しては、全学的な対策が必要だと考える。今後は、従来の私語対策とともに、全学的な対応と足並みを揃える形で取組みを継続していく。</li> <li>(2) 今年度は、講義担当者のうち定年退職者がおり、それに対する特別専任、および非常勤講師の採用に際して、新カリキュラムにおける開講数、および新カリにおいて提供すべき講義内容の検討を視野に入れた選考を行った。なお、退職者の補充については、次年度にむけて継続的に行っていく。</li> </ol> </li> <li>3. 現行カリキュラムについて精査し、次期カリキュラムについて検討すること。特に、2019年からの新カリキュラムの具体的構築に取組むこと。 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) カリキュラム改編にむけたワーキンググループを改めて立ち上げ（6名）、そこでの検討結果をもとに、共通科目部門会議において新カリキュラム案を検討し、教体会議に提出した。なお、科目群については「演習科目」と「総合講義」を廃止して「人間科学」「人文科学」「自然・数理科学」「社会科学」「地域と世界」「キリスト教学」「キャリア支援」の7つとした。更に、前回カリキュラム改編時からの懸案であった開講数の削減目標も実現した。</li> <li>(2) 2019年度からの新カリキュラムの施行にむけて、退職者の補充時をはじめとして、適切な人員補充と配置、及び授業内容の検討を継続的にすすめている。</li> </ol> </li> </ol>

	<p>4. FD の具体的な推進</p> <p>(1) 3月 14 日に「教育の質保証に向けて—検討状況と今後の取組みについて—」というテーマで、共通科目部門 FD を実施する。内容は、学長による諮問を受け、2017 年 8 月より副学長の下で行われている「教育課程の質保証プロジェクト」におけるこれまでの検討状況を報告するとともに、今後求められる取組みについて議論するものとなる。なお、このプロジェクトには、本部門からプロジェクト長を含む 3 名が参加している。このような検討は、共通科目部門における新カリキュラムの施行に際しても大きな意義を有すると考える。</p> <p>5. その他</p> <p>(1) 今年度は、公開講座を実施しなかった。次年度にむけて、開講の可能性を検討する。</p>
次年度への課題	<p>1. 2019 年度からの新カリキュラムの円滑な実施</p> <p>2. カリキュラム移行期における諸問題の調整と解決</p> <p>3. クラス規模適正化に関わる諸要素の検討</p> <p>4. FD の継続的な推進（継続）</p>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「教育の質保証」について注力した FD を実施したことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられているが、クラス規模の適正化に取組むこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 19. 言語教育部門会議【報告者：議長 山本 範子】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられている、リメディアル教育の検討に着手すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 2017 年度カリキュラムの運用と新カリキュラムの検討</li> <li>2. CALL システムの円滑な運用と e ラーニングのさらなる充実(継続)</li> <li>3. 正規カリキュラム以外での言語教育活動による学習への動機付け (継続)</li> <li>4. 国際教育センターとの協力推進と国際ラウンジの活用 (継続)</li> <li>5. リメディアル教育の検討 (継続)</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<p>1. 2017 年度カリキュラムの運用と新カリキュラムの検討</p> <p>全体としてカリキュラム運営は順調に進められた。</p> <p>新カリキュラムについてはワーキンググループを発足、また全体では FD で話し合うなどし、非常勤講師の採用方法などを変更した。今後も継続して話し合いを続ける。</p> <p>また社会連携課と協力して、外部から国際的な詩人を呼び、講演会を開催した。</p> <p>ドイツ語では 4 月から教科書を大幅改訂し、新たな教授法を導入した。英語では新たに強化クラスを 4 つ（経済学部 2、文学部 1、社会福祉学部 1）設置した。また FD では短期大学部英文学科の取組みを学び、評価方法や動機付けの部分において得るもののが非常に多かった。また 5 言語で総計約 80 名が海外事情に参加した。</p> <p>新カリキュラムの少人数クラスに向けて、システム作りに着手した。</p> <p>2. CALL システムの円滑な運用と e ラーニングのさらなる充実(継続)</p> <p>スムーズに行われた。システムの入れ替えも部門の意向が反映された。スーパー英語の活用が順調に強化されており、学生への課題を前年度比 2 倍に増やしたが、学生は問題なく対応した。順調な成果を挙げている中、学生の期待により対応できる態勢を整えることが望まれる。Moodle は英語プログラム内で引き続き使用され、学生は授業以外で英語を練習し、教師は Moodle を評価目的で使用することができます。</p> <p>3. 正規カリキュラム以外での言語教育活動による学習への動機付け (継続)</p> <p>例年どおり外国語朗読会が行われた。今年はチャプレンによる聖書の解説もあり、留学生の参加もあった。</p> <p>英語については、文部科学省トビタテ JAPAN 北海道代表に学生（経済学部・英語副専攻）が選抜された。強化クラス TOEIC 勉強会（77 人・12 グループ・それぞれ 1 コマ 18 回ずつ実施）、強化クラス TOEIC 受験（7 月・12 月）、海外事情土曜日勉強会・合宿（3 回）、英語エッセイの添削、DMM 英会話（スカイプを用いた海外講師との会話）の活用、学生主催の海外渡航座談会（経済学部・社会福祉学部）、ようこそ先輩企画（3 年生から 2 年生へ、4 年生から 2 年生へ）、毎週月曜日～金曜日：昼休みに海外事情の準備学習（ブリスベン班は現地コーディネーターとの英語でのスカイプ会議など、シドニー班はシドニー大学教育学部の協力を得て、プログラムの共同企画など）を行った。</p> <p>TOEIC 対策は初めての取組みだったが、学生たちが切磋琢磨する雰囲気づくりはできたと考える。</p> <p>ドイツ語では、オーストリア政府公認ドイツ語能力検定試験 A2 に 3 名の学生が合格した。</p> <p>フランス語では、昼休みに課題の仮作文の添削指導および発音矯正を個別に実施。今年度の文科省後援の実用フランス語技能検定試験において、北海道地区では北星の学生の受験者数が増加し、3 級は本学の学生が全体の 1/3 を占め、準 2 級の合格者中、本学学生の比率は 38% となった。また 4 年ぶりに 1 名の 2 級の合格者を得た。文化の日に開催される北海道フ</p>

	<p>フランス語暗唱コンクールについては、毎年本学学生が入賞しているが、今年度の第5回目の大会では、2名がそれぞれ第3位と在札フランス名誉領事賞を受賞した。</p> <p>中国語では、20名を超す海外事情参加者、40名を超す上級中国語履修者など、年々学習者が増えており、それに伴い自主的に台湾や中国大陆へ短期語学研修に参加する者、旅行に行く者が増加している。またアルバイトで中国語を使用する頻度が増加しており、アルバイト用の中国語を自習するための教材の配布なども行っている。</p> <p>韓国語では、韓国語能力試験（TOPIK）の最上級レベルである6級に2名（上級クラスの1名、「海外事情」の1名）が合格。また韓国語弁論大会に学生2名が出場し、各々銅賞と奨励賞を受賞した。</p> <p>4. 国際教育センターとの協力推進と国際ラウンジの活用（継続）</p> <p>道内の高校生対象のイングリッシュ・キャンプ、国際ラウンジで行われたインターナショナル・カフェ、派遣留学生報告会、イングリッシュ・ランチタイム（週一）などに協力した。なお3に記した外国語朗読会も国際教育センターと共に共催のものである。</p> <p>5. リメディアル教育の検討（継続）</p> <p>アクセシビリティ支援室と連携し、修得困難な学生の対応を行うと共に、普段の授業内でも学習困難な学生には積極的に声かけ、個別指導、相談にのるなどを行った。英語ではアクセシビリティ支援室との連携を行い、教室に入れない学生に対して日本人・ネイティブそれぞれが毎週学生対応を行い、通常授業に準ずる指導を行った。それと関連し、再履修クラス導入についても検討を開始した。</p> <p>6. その他</p> <p>Englishだべり場（週一回）、ゴスペル・クワイアの学生とのゴスペルを学ぶ会（月一回）、イングリッシュ・チャペル・タイムとその後のイングリッシュ・ディスカッション（週一回）、イングリッシュ・ランチタイム（週一）など、スマス・ミッションセンターの活動に積極的に協力した。</p>
次年度への課題	<p>1. 2017年度カリキュラムの運用と新カリキュラムの検討</p> <p>2. 正規カリキュラム以外での言語教育活動による学習への動機付け（継続）</p> <p>3. 国際教育センターとの協力推進と国際ラウンジの活用（継続）</p> <p>4. リメディアル教育の検討（継続）</p> <p>5. スマス・ミッションセンターとの連携（新規）</p>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国語朗読会、各種語学検定、コンクール等正規カリキュラム以外の学修を積極的にサポートしたこと評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 20. 教職部門会議【報告者：議長 古谷 次郎】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教職課程再認定申請においては、各学部・学科と連携し遗漏なく取組むこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 直面する教職課程再課程認定への的確な対応。2019 年度（一部 2018 年度）新カリキュラムに即した教職課程運営と円滑な授業運営・学生指導</li> <li>2. 新教員免許法に対応する教職課程カリキュラム改革の推進及び組織体制の再構築。前者については、既存の教職学習支援活動の正規授業化（単位化）の検討等を含み、後者については、教職課程センター（仮称）の可能性を含めた実質的検討を課題とする</li> <li>3. 札幌圏教職課程コンソーシアム（必修領域）を含む教員免許状更新講習の実施</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<p>1. 2018 年 4 月 27 日までの再課程認定申請に向けて、情報収集に努めるとともに、教職部門内での検討を進め、文部科学省のコアカリキュラムに対応した 2019 年度入学生の教職に関する科目のカリキュラムを決定した。さらに、経済学科・経済法学科の 2018 年度入学生及びその他の学科の 2019 年度入学生からの教科に関する科目のカリキュラムについて、各学科と連携・調整を図り、決定することができた。また、3 月 31 日付で「教職課程年報」第 1 号（論説 6 編+資料）を刊行することができた。</p> <p>2. 既存の教職学習支援活動の正規授業化（単位化）は、科目数を増やさないという制約の下、2019 年度入学生のカリキュラムでは、見送らざるを得なかった。しかし、オープンユニバーシティの活用などにより、より充実させる方策を部門 FD で検討を行った。教職課程センター（仮称）の設置を含む、教職課程に関する全学的組織について、教職部門で複数の案について、鋭意、検討を進めた。</p> <p>3. 教員免許更新講習の必修領域 6 時間の講習を、札幌圏教職課程コンソーシアムの当番校として、障害児教育夏季セミナーと共に開催・実施した。また、各学科・他部門の協力により、選択必修領域 4 講習、選択領域 4 講習を開催・実施することができた。</p> <p><b>【資料】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教職実習準備室来室者数：延べ 3,270 人（学生 2,419 人、教員 709 人、卒業生 142 人）</li> <li>・教職学習支援活動：教員採用試験対策自主学習会指導 112 回（教員 47 回、実習助手 58 回、卒業生 7 回）、社会科教育基礎力養成指導 36 回、特別支援教育学習会 15 回</li> <li>・教育実習訪問指導：基礎免許 71 校・72 名、特別支援免許 12 校・14 名</li> <li>・小学校教諭一種免許状取得支援プログラム：新 2 年生参加者 2 名、合計 12 名</li> <li>・札幌市教委学生ボランティア事業新規参加者数：11 名 北海道教育委員会学生ボランティア事業大学経由新規参加者数：3 名</li> <li>・教員免許更新講習：必修 1 講習 43 名、選択必修 4 講習 47 名、選択 4 講習 34 名</li> <li>・障害児教育夏季セミナー参加者：308 人（一般 262 人、本学学生 3 人、更新講習受講者 43 人）</li> <li>・北海道・札幌市公立学校教員採用試験登録者：42 名（内、現役 17 名） 内訳：中英 3 名、高英 11 名、中社 2 名、高公民（政経）2 名、高公民（倫理）1 名、特別支援（中）10 名、特別支援（高）6 名、特別支援（小）3 名、小学校 4 名。他に私立高（英）3 名</li> </ul>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教職課程再課程認定への対応。【継続】</li> <li>2. 2019 年度（一部 2018 年度）新カリキュラムに即した教職課程運営と円滑な授業運営・学生指導。</li> <li>3. 教職課程に関する全学的組織の検討。</li> <li>4. 教職学習支援活動の継続と充実。</li> </ol>

自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・北海道・札幌市公立学校教員採用試験登録者が昨年度より 12 名増の 42 名となり、私立学校採用者も 2 名増の 3 名であったことを評価する。</li></ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・教職課程に関する全学的組織の設置も含め、教職課程再課程認定申請を遺漏なく行うこと。</li></ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・該当なし。</li></ul>
------------------------	---

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 22. 教学会議【報告者：議長 鈴木 剛】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられている、大学間連携共同教育推進事業の新しい展開に向けて対応すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教職課程再認定申請に向けての対応</li> <li>2. 新カリキュラム策定（カリキュラムマップ、ナンバリングを含む）に向けての対応</li> <li>3. 北星スタンダードの具現化に向けての検討</li> <li>4. 6大学包括的連携協定に基づく事業の今後の展開についての検討</li> <li>5. 大学間連携共同教育推進事業の新しい展開に向けての対応</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教職課程再認定申請に向けての対応 2019年度の再課程認定に向けて、短期大学部を除くすべての学科において「一学科一免許状以上」の教職課程確保という基本方針通り、かつ、新免許法の求める基準をクリアしてその準備を行うことができた。また、2018年度新カリスタートの経済・経済法・福祉心理の3つの学科についても免許対応の課程認定の準備ができた。</li> <li>2. 新カリキュラム策定（カリキュラムマップ、ナンバリングを含む）に向けての対応 上記3学科については2018年度スタート、それ以外の7学科については2019年度スタートの新カリキュラムの策定がなされた。「大学及び短期大学部の今後の方向について」の方針の下に検討した、英語の全学必修化については、これを行わないこととし、また外国語必要単位数は8単位とする一方、外国語クラスの一部少人数化について実施することとした。全学共通科目については、科目数の20パーセント削減を目標に実施し、情報科目・日本語科目の必修単位数を2学科に限り減らした。これは、共通科目についての2007年度決定の枠組みを一部緩和する処置であった。また、キャリア支援科目の授業内容・授業運営の一部について調整を行った。全学共通科目については、全学的な今後の再検討課題とされた。カリキュラムマップ、ナンバリングについては次年度の課題としてもち越された。</li> <li>3. 北星スタンダードの具現化に向けての検討 「教育課程の質保証に関する全学的な推進について」（学長諮問）を受けて、副学長（教学会議）の下に「教育課程の質保証プロジェクト・チーム」を立ち上げ、活動を開始した。「北星スタンダード」という枠組み自体の有効性を含め、本学における教育質保証のための具体的方策と展望及び本学における実施状況の集約・分析などの検討を重ねている。新カリキュラムのナンバリングとマップの作成に当たり、質保証の実質化の取り組みとしてこれらを結合して進めるための全学的な議論が必要となっている。</li> <li>4. 6大学包括的連携協定に基づく事業の今後の展開についての検討 GPへの採択の経緯で始まったこの事業であるが、2017年度は教学系での活動展開ではなく、もっぱら大学管理系（人事管理、旅費執行）でのそれに限られているため、来年度の課題項目からは除外し、教学系の展開が出てくれば対応することとする。</li> <li>5. 大学間連携共同教育推進事業の新しい展開に向けての対応 過去5年間の事業成果（データの蓄積と分析）を踏まえた、8大学での総括と検証の取り組みが継続している段階であり、来年度は総括会議の開催校となっている。今後の方向として、その成果を本学の2018・2019年度カリキュラムに対応した、教育質保証の具体方策や「北星スタンダード」のあり方の検討と結びつけ位置付けていく必要がある。</li> </ol>

次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 新カリキュラムに対応したカリキュラムマップ、ナンバリング作業の実施及びカリキュラム実施上の調整。</li> <li>2. 教育の質保証に向けた全学的作業の開始。特に、「教育課程の質保証」プロジェクトとの連携を下にして進めていく</li> <li>3. 教職課程再認定申請への継続的対応</li> <li>4. 高大連携（特に学園内連携）の具体的方策の推進・強化とその検証</li> <li>5. 全学的な教職協働のあり方の検討</li> </ol>
自己点検評価委員会からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「教育課程の質保証」の検討に着手したことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられているが、新カリキュラムに対応したカリキュラムマップ、ナンバリング作業を遗漏なく行うこと。特に経済学科、経済法学科、福祉心理学科の3学科は2018年度から新カリキュラムが開始されるので、この3学科については早急に対応すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 23. 学則諸規程委員会【報告者：委員長 田村 信一】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「学則及び諸規程の体系的整備についての検討並びに各部門への提案」は 2009 年度以降、課題としてとしているが、毎年度提案に至っていない。課題として取上げるのであれば、しっかりと取組むこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 逐年で実施すべき学則及び諸規程の改廃</li> <li>2. 大学諸規程において制定を検討すべき規程案の立案</li> <li>3. 学則及び諸規程の体系的整備についての検討と各部門への提案</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 逐次、委員会を開催し、学則の変更案及び諸規程の改正案を立案した。             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1)一部を変更した学則 「大学学則」、「大学院学則」</li> <li>(2)一部を改正した規程及び要領等 「カウンセラーの選考に関する規程」「紀要『北星論集』刊行要項」「紀要『北星論集』退職記念号取扱要領」「外国人研究生の受入取扱要領」「大学院外国人研究者招聘制度取扱要項」「副学長、学部長等の選任に関する規程」「社会福祉実習委員会要領」「助教取扱要領」「名誉教授称号授与規程」「教育職員のサバティカル制度に関する規程」「個人研究費取扱要領」「個人研究費傾斜配分のための研究業績評価取扱要項」「国外研修期間中における個人研究費の支出要領」「特定研究費取扱要領」「公的研究費の管理・監査実施体制に関する規程」「大学院（博士課程）学位論文審査実施要領」「授業科目の履修等に関する規程」「副専攻に関する規程」「図書館利用規程」「心理臨床センター相談室運営要領」「アクセシビリティ支援室規程」「学費等の減免、徴収及び返戻の取扱に関する規程」</li> </ol> </li> <li>2. 「受入交換留学奨学金規程」「紀要『北星論集』追悼号取扱要領」「学内ワークスタディに関する取扱要領」「人を対象とする研究・実験に関する規程」を制定した。</li> <li>3. 年 1 回の大学規程集の加除（追録第 17 号）において、従前どおり規程集の整備を行い、合わせて外国大学等との学生・教員交流関係協定書の差替も行った。なお、必要な個別具体的規程の整備は行ったが、学則及び諸規程の体系的整備についての検討並びに各部門への提案には至らなかった。</li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 逐年で実施すべき学則及び諸規程の改廃</li> <li>2. 大学諸規程において制定を検討すべき規程案の立案</li> <li>3. 学則及び諸規程の体系的整備についての検討と各部門への提案</li> </ol>
自己点検評価委員会からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題の 3 項目目に対して、前年度に自己点検評価委員会から「努力課題」としたが、残念ながら今年度も取組まれず次年度の課題となっているので、次年度はしっかりと取組むこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 24. 全学危機管理委員会【報告者：委員長 田村 信一】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられている、教職員の業務に係る倫理を保持するための諸施策及び国外の諸情勢の変化に即応する大学の危機対策方針について検討すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教職員の業務に係る倫理を保持するための諸施策等の検討について取組む。</li> <li>2. 国外における地域の諸情勢の変化に即応する大学の危機対策方針を検討し、迅速に実施できるように関係規程の整備を進める。</li> </ol>
取組の結果と 点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教職員の業務に係る倫理を保持するための諸施策の検討及び倫理調査委員会の具体的な検討について取組むには至らなかつたが、昨年度に引き続き、倫理綱領に基づき、研究倫理審査申請書の審査（21件）を行つた。なお、研究倫理申請書の遡及提出については受理しないこととした。            ※ 研究倫理審査申請書の審査については、「北星学園大学 人を対象とする研究・実験に関する規程」が制定されたことに伴い、次年度からは新しく設置される「倫理審査委員会」において審議されることとなつた。</li> <li>2. 国外における地域の諸情勢の変化に即応する大学の危機対策方針を検討し、迅速に実施できるように以下の対応を行つた。ただし、関係規程の整備には至らなかつた。               <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 北朝鮮情勢に係る韓国カトリック大学校への派遣留学生に関する対応について、必要に応じてカトリック大学校との協議をしていくことも含め、派遣中断及び帰国対応等について確認した。</li> <li>(2) 北朝鮮情勢に係るJアラートへの対応に関して、内閣官房国民保護ポータルサイトを基に掲載内容を確認し、大学ホームページに「Jアラート（全国瞬時警報システム）による情報伝達及び対応について」を掲載して学生及び教職員への周知を行つた。</li> </ol> </li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教職員の業務に係る倫理を保持するための諸施策等の検討について取組む。</li> <li>2. 国外における地域の諸情勢の変化に即応する大学の危機対策方針を検討し、迅速に実施できるように関係規程の整備を進める。</li> </ol>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられているが、国外の諸情勢の変化に迅速に対応できるよう、関係規程の整備を行うこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 25. 自己点検評価委員会【報告者：委員長 田村 信一】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

本年度の課題	1. 本学の自己点検評価のあり方について〔継続〕 (1) 点検・評価結果を大学全体として共有し、「質の保証」と「質の向上」に繋がるよう、本学の在り方・課題を再認識し実質的なPDCAサイクルの確立を目指す。 (2) 自己点検評価報告書の大学ウェブサイトでの公開を検討する。 (3) 外部評価委員会（仮称）の設置について検討する。 2. 第3期認証評価に向けた対応を検討する。〔継続〕
取組の結果と点検評価	1. 本学の自己点検のあり方について (1) 自己点検評価報告書・評価資料を教職員HPで公開し、大学全体として共有した。また自己点検評価資料の精査と資料項目の変更を各課の協力を得て行い、点検項目の実質化を進めた。学内外に冊子配布していた自己点検評価報告書については、一部を残しデータ化して発送する方法に変更し、コスト削減を行った。 (2) 2017年度自己点検評価報告書を2018年度より大学ウェブサイトで公開することを決定した。 (3) 2018年度に外部評価委員会（仮称）の立ち上げを目指し検討を行った。 2. 2019年7月末日に大学基準協会に提出する改善報告書作成にむけ、努力課題で指摘された事項の対応状況を確認した。
次年度への課題	1. 本学の自己点検評価のあり方について〔継続〕 (1) 点検・評価結果を大学全体として共有し、「質の保証」と「質の向上」に繋がるよう、本学の在り方・課題を再認識し実質的なPDCAサイクルの確立を目指す。 (2) 引き続き2018年度内に外部評価委員会（仮称）の立ち上げを目指し、検討を行う。学外者から意見を聴取することにより内部質保証の妥当性を客観的に担保し、意義のある自己点検・評価となるよう作業を行う。 (3) 自己点検評価報告書を大学ウェブサイト上で公表し社会に対する説明責任を果たすことで、内部質保証システムの向上を図る。 2. 第3期認証評価に向けた対応を検討する。〔継続〕 3. 自己点検評価報告書の記載要領の見直しを行う。

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 26. 教員評価委員会【報告者：委員長 田村 信一】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられている、教員評価システムの構築について引き続き取組むこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<p>1. 教員評価については、管理運営・社会貢献などを総合的に評価する評価項目に基づいて試行的に始め、試行期間2年の運用を終えたが、その内容について精査を実施する。  <b>【2017年度大学運営計画の4】</b></p> <p>2. 研究活動自己点検評価報告での要望について継続的に検討する。</p>
取組の結果と 点検評価	<p>1. 今年度については「次年度以降教員評価を行う」ことを決めた。項目については教育、管理運営、社会貢献の3分野とともに新年度、詳細の項目や個人研究費、特定研究費などを含めて学長諮問のワーキング・グループ（WG）を設置し、検討を進めていくこととした。  <b>【2017年度大学運営計画の4】</b></p> <p>2. 要望のあったもののうち、従前から希望が多かった個人研究費の支出手続き期限を2018年度から試行的に3/15までとして、より年度内研究活動を遂行できるようにする。また特定研究費についても一部規程を改定し研究活動に配慮するようにした。なお、個人研究費配分額のうち「新任教員加算額」については次年度から廃止することとした。</p>
次年度への課題	<p><b>【2018年度大学運営計画の4】</b></p> <p>1. 教員評価委員会（学長）諮問のWGを設置し、教員評価システム構築に向けて項目の検討を行う他、個人研究費、共同研究費、特定研究費（学会活動支援等）、傾斜配分などの見直しについての検討を行い、研究活動がより活発になるよう見直しを進めていく。</p>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人研究費の支出手続き期限を試行的に3/15まで延長し、より年度内研究活動を遂行できるようにしたことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度の課題に挙げられている、教員評価委員会（学長）諮問のWGを設置し、教員評価システム構築に向けて項目の検討を行うこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 27. 運営・財務点検委員会 【報告者：委員長 松本 康一郎】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<p>1. 今年度策定した“点検評価項目”について、丹念な点検評価を行う。</p> <p>2. 前年度に引き続き、補正予算に反映させるべく、予算執行状況の点検を厳格かつ早期に実施する。</p> <p>3. 大学の組織運営について、今年度までに検証された課題を解消するべく改善が行われているのかを検証する。とりわけ、前年度に行われた職員組織の改編が組織運営に対して有効に貢献しているのかを検証する。</p> <p>4. 「非常勤講師問題」に関する総括文書は、今後の対策に関わることも含めて、もう一度改めて学長に提出を求め検証する。</p>
取組の結果と 点検評価	<p>1. 今年度は、主に「財務状況に関する点検」、「組織運営に関する点検」の2つについて点検評価を行うことを課題とし、一部を除き策定した全ての事項について丹念な点検評価を行うことができた。各項目の具体的な取組みと結果は、以下2～3のとおりである。</p> <p>2. 財務状況に関する点検</p> <p>各部門における2016年度の予算執行状況について、過去3か年の予算執行状況の推移や2017年度当初予算を踏まえた点検を補正予算作成に反映させるべく早期にかつ厳格に実施した。その結果、助言(14件)・勧告(10件)・提言(4件)を示すことができた。</p> <p>また、今年度は、予算執行率だけに注目した点検ではなく、適正な予算申請手続きが行われているか、予算積算・執行が適正な部門で行われているか等、一步踏み込んだ点検を実施することができた。</p> <p>3. 組織運営に関する点検</p> <p>(1) 2016・2017年度の2年間についての職員組織改編による改善点と課題に関する報告書の作成を事務局長に求めた。報告書の提出は、2018年9月末までとの回答を得たが、今年度中の検証を行うことができなかつた。</p> <p>(2) 2015年度に受給された科学研究費助成事業に関する内部監査を実施した。</p> <p>4. その他</p> <p>2014・2015年度に発生した「非常勤講師問題」に関しての学長総括文書の再提出を求めた。提出された総括文書を委員会で検証し、新学長と事務局長に取扱い及び提言を行う。</p> <p>以上のことから「ほぼ達成された」と総括することができる。</p>
次年度への課題	<p>1. 次年度始めに“点検評価項目”を策定し、点検に係る計画を立て、それに基づいた丹念な点検評価を行う。</p> <p>2. 今年度に引き続き、予算積算に反映させるべく、予算執行状況の点検を厳格かつ早期に実施する。</p> <p>3. 大学の組織運営について、事務局長から提出される、職員組織の改編に伴う総括文書に基づいて、次年度以降に向けての課題等を検証する。</p> <p>4. 新学長に対して、本学が有する課題とそれに対する取組み方針に関する文書提出を求める。</p>

自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・予算執行率だけに注目した点検ではなく、予算申請手続きが適正に行われているか、予算積算・執行が適正な部門で行われているか等、踏み込んだ点検を実施したことを評価する。</li></ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・該当なし。</li></ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・該当なし。</li></ul>
------------------------	--

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 28. 学生支援委員会【報告者：委員長 鈴木 剛】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に「体育運営委員会の設置可能性についての検討」とあるが、次年度から委員長が副学長となり、また学生支援委員会の任務に「体育施設・機器備品の管理等」が加わり、このことを検討する際には保健体育科目担当教員と財務課長が加わるようになったので、まずこの体制で実施検討し、点検評価を行ったうえで検討すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学生自治会の指導・支援（継続）</li> <li>2. 禁煙啓発の遂行継続（継続）</li> <li>3. 飲酒事故防止に向けた啓発活動（継続）</li> <li>4. 自宅外通学支援奨学金制度の取扱いについて（継続）</li> <li>5. 近隣住民への配慮を目的とした本学学生のマナー向上</li> <li>6. 体育運営委員会の設置可能性についての検討</li> </ol>
取組の結果と 点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学生自治会の指導・支援（継続）           <p>学生自治会運営委員会は、今年4月のオリエンテーション時に自らの企画立案により「新入生歓迎会」を実施した。内容は新入生にとって有益な情報（学生医療互助会の存在や利用方法、サークル紹介等）を提供するものであった。学生自治会運営委員会が主体的かつ積極的に活動を行った事は大変高く評価でき、今後の活動にも更なる期待が持てる状況になった。引き続き学生自治会の指導・支援を継続したい。</p> </li> <li>2. 禁煙啓発の遂行継続（継続）           <p>今年度もオリエンテーション期間に1年次学生に対し実施される講演会、構内巡回指導及び通学路通行指導等（業務委託）などにより、継続的に禁煙意識を高めることを実施した。吸い殻拾い（状況によっては大学通用口の敷地外も実施）、敷地内喫煙者（学生他）への注意、通学路（サイクリングロード）の通行指導を業務委託で実施し、禁煙啓発を継続的に進めた。</p> </li> <li>3. 飲酒事故防止に向けた啓発活動（継続）           <p>全国的に度々起きる飲酒事故を受け、本学でも教職員への注意喚起、学生へのメールや掲示による注意喚起、父母（保証人）へ文書の発送により飲酒事故防止協力依頼を行っている。大学での取組みへの理解と、家庭での啓発を求めるため、後援会の協力を得て『後援会だより』に全父母（保証人）への飲酒事故防止協力依頼文を同封し、より一層の飲酒事故防止に取組んだ。こうした取組みの成果もあり、今年度も本学では飲酒による事件・事故はなかつた。</p> </li> <li>4. 自宅外通学支援奨学金制度の取扱いについて（継続）           <p>2年目を迎えた本制度は、今年度49名を採用した。入学者へのアンケートを実施したところ本奨学金の採用が本学入学への決め手となったとの回答が多く見られ、今年度も本制度の効果を実感できる結果となった。次年度以降も制度の定着を目指し、より一層の充実をはかりたい。</p> </li> <li>5. 近隣住民への配慮を目的とした本学学生のマナー向上           <p>近年、サイクリングロードの登下校時における本学学生のマナー違反（自転車の暴走、道幅を多人数で塞ぐ等）が近隣住民から数多く寄せられている。又、近隣商業施設からは本学学生による迷惑駐車の苦情も度々あった。今年度は、そうした状況を鑑み学生及び保証人にも可能な限り文書等を中心に本学学生のマナー向上を訴えた。又、以前から業務委託しているサイクリングロード通学整理作業員の尽力も加わり、今年度は例年になく外部からの苦情が減少した。ただ、苦情には至らないものも相当数予測される為、今後も引き続き本学学生</p> </li> </ol>

	<p>のマナー向上を推進していきたい。</p> <p>6. 体育運営委員会の設置可能性についての検討</p> <p>今年度から委員長が副学長となり、また学生支援委員会の任務に「体育施設・機器備品の管理等」が加わり、このことを検討する際には保健体育科目担当教員と財務課長が陪席することとなった。今年度は、初めてという事もありその体制や審議の在り方について意見交換を行った。具体的な検討としては長年懸念事項とされていた「屋外競技サークルの冬期間の体育館使用について」の可否について決定が出来た。新しい体制にした事の長所と評価できる。今後もこうした長所を活かした新体制の機能的な運営について模索したい。</p>
次年度への課題	<p>1. 学生自治会の指導・支援（継続）</p> <p>2. 禁煙啓発の遂行継続（継続）</p> <p>3. 飲酒事故防止に向けた啓発活動（継続）</p> <p>4. 自宅外通学支援奨学金制度の取扱いについて（継続）</p> <p>5. 近隣住民への配慮を目的とした本学学生のマナー向上（継続）</p> <p>6. 新体制による学生支援委員会の運営について</p>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自治会活動への支援及び禁煙・飲酒・マナーに係る啓蒙活動など、学生支援・指導に積極的に取組んだことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学内全面禁煙の徹底について検討すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 29. 広報委員会【報告者：委員長 濱 保久】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャンパスガイドウェブのリニューアルを遗漏なく行うこと。</li> <li>・学生広報委員による SNS の運用は慎重に行うこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. キャンパスガイドウェブを学生が使いやすいサイトにリニューアルする。</li> <li>2. 学生広報委員も含めた新しい広報展開の検討。具体的には Twitter や Instagram など、SNS の活用を継続して検討する。</li> <li>3. 入学者アンケートや学生生活実態調査の結果を分析・検討し、今後の広報展開に活用する。</li> <li>4. 法人と連携し、学園創立 130 周年を活かした広報展開を行う。</li> </ol>
取組の結果と 点検評価	<p>1. キャンパスガイドウェブ（以下「CGW」という）の改変を全学的視野のもと進めるため、全ての部署・センターから意見を収集し、掲載を希望する部署・センターの情報はすべて閲覧出来るようにした。カテゴリを設け、学生が気になっているニュースを絞って閲覧することも可能である。希望した場合は、各部署から直接情報を発信することが可能であり、より多くの情報を学生に届けられるようになった。各部署からの投稿があった際は、広報係宛てにメールが届くようになっており、投稿内容は必ずチェックできる仕組みとなっている。</p> <p>今まで、分散していた学生に向けた情報を CGW に集め、総合情報センター及び CALL 教室のトップページを CGW にすることで、学生は学内のパソコンでブラウザを起動させると CGW を見ることが出来るようになり、学生にとって必要な情報やリンクがすべて揃ったサイトを構築することが出来た。</p> <p>2. 学生の目線を活かし、大学の魅力を伝えることを目的とした学生広報委員の新たな広報展開として、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) ここリカ・プロダクションとの連携による FM しろいしのラジオ番組「つながるここプログラジオ」内のコーナー約 12 分を 6 月から担当し、番組の出演だけではなく番組の流れの把握、シナリオ作成、ゲストを呼んでの番組運営までを出来るようになった。ラジオ番組を通して、関わった学生の成長は著しく、音声だからこそ伝えられる北星のよさという新しい広報のあり方がほぼ確立したと考える。</li> <li>(2) Twitter や Facebook の活用も模索したが、頻繁な更新は難しいことと、本学キャンパスの四季の移り変わりを広く知らせるツールとして最適な Instagram に絞って検討した。試用運用を経て現在は公開に至っている。新 CGW にも学生広報委員の Instagram を活用しており、今後本格的に運用していく予定である。</li> <li>(3) 今まで発行してきた受験生向け広報誌「starbox」はウェブ情報誌へと変わり、学生向け広報誌「Balloon」と学外向け広報誌「HOKUSEI@COM」は統合することとなった。そのため、配布する広報誌の数が減ったこともあり、HOKUSEI@COM のページ数を増やし、広報誌の魅力を上げることになった。その中で、学生広報委員が企画するページを 1 ページ設け、学生目線を活かした広報展開を行うこととした。大学近隣世帯 16,000 世帯に新聞折込していることから、地域の方に向けた誌面を学生なりに制作しているほか、昨年度初めて制作した全てのページを学生広報委員が企画・制作している広報誌「キタボシ」を今年度も制作した。今年度同様、次年度のキャンパス説明会の際に学生広報委員から手渡しして配布する予定である。</li> <li>(4) 受験生に喜んでもらえる大学オリジナルグッズを制作するため、学生がデザインを一から考えたオリジナル消しゴムを制作した。次年度のキャンパス説明会で配布するグッズに封入予定である。</li> </ol>

	<p>3. 2018年度の広告展開を考えるに際して、まず、地下歩行空間の活用が有効であると判断したが、その費用捻出のために既存の広告展開を見直す必要に迫られた。その際に、入学者アンケートとキャンパス説明会アンケートの分析結果を活用し、地下鉄出入り口上部の広告はあまり認識されていないことから、この事業を取り止めることとなった。今後もアンケート結果を基に掲出媒体の検討を行う。</p> <p>4. 今年度は学校法人北星学園創立130周年ということもあり、HOKUSEI@COM（9月号および1月号）では、創立130周年についての特設ページを設け、北星の歴史についてアピールすることが出来た。</p> <p>5. 2015年度から3年間をかけ「START★」をコンセプトとしたメインビジュアルを展開してきた。この3年間で、大学のシンボルカラーが「青」で「星」のイメージがあることなどスタイルリッシュな大学像を定着させることができた。その結果、大学ブランド・イメージ調査では、2年間に亘って「センスがいい、かっこいい」という項目が北海道地区第1位となるなど、対外的に認められたことは評価できると考える。定着してきたよいイメージをさらに発展させるため、2018年度以降の制作会社を選定するためのコンペを行った。今年度は透明性・公平性を保つため、業者をホームページ上で公募することとし、結果として6社からの応募があった。厳選な審査の結果、最終審査へは2社進み、慎重かつ厳正に審査した結果、これまでのイメージをよりよく発展させる提案を行った業者に決定した。提案のあったメインビジュアルを今後より詰めていき、ブラッシュアップを行ったメインビジュアルを2018年度から展開していく。</p>
次年度への課題	<p>1. 新しくなったCGWとその利用方法について学生への周知を図る。</p> <p>2. 学生広報委員のInstagramを大学広報としても利用し、SNSを活用した広報展開に活用する。</p> <p>3. インターネット広告の利用可能性について検討する。</p> <p>4. ラジオ番組プロジェクトの効果検証を試みる。</p>
自己点検評価委員会からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全学的視野・利用学生目線にたって、キャンパスガイドウェブの改変を行ったことを評価する。</li> <li>・ラジオ番組出演、Instagramの運営、広報誌及びオリジナルグッズの制作など、学生広報委員活動が活発に行われたことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各課・部署と連携して、キャンパスガイドウェブの利用方法周知を行うこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 30. 図書館運営委員会【報告者：委員長 萩内 豊】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>閉架書庫のカビ発生の再発防止に努めるとともに、資料収容力の維持・拡張のための蔵書の軽量化を進めること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>HOLLY（統合検索システム）を中心とした文献検索ガイドの再構築</li> <li>不用資料選定基準に基づく蔵書の軽量化（継続）</li> <li>閉架書庫のカビ対策をはじめとする資料保存環境の整備</li> <li>図書館業務システムの更新及び図書館ホームページのリニューアル</li> </ol>
取組の結果と 点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>HOLLY を検索ツールのメインに位置づけ、文献検索ガイドで利活用を浸透させた。便利なシステムである反面、論文・雑誌・図書・紙媒体・電子リソースなど異なる性質の情報を一括するため、検索結果から目的の文献を見つける絞り込み技術の支援が利用者のレベルに応じて必要となった。また、コンテンツの充実は、不要な情報を増やすことにもなっているため検索対象とするデータベースの変更などシステム的な調整・改良も重ねた。</li> <li>「不用資料選定基準」を適用した蔵書の軽量化を本格的に実行した。図書は内容が古い情報科学分野やテキスト的な学習書の旧版などをその資料価値に注意しながら抜き取り、雑誌は所蔵期間が短く号数もまばらなものや、媒体が電子に替わったものを廃棄の対象とした。その結果、約 250 段の空棚が生まれ、僅かではあるが収容力の寿命を延ばしたといえる。かねてから収容力の限界は 2020 年と少しのところと表明しているが、この作業をサイクル化しながら、次の排架・書架増設を計画していく。</li> <li>前年にカビが発生した閉架書庫は、大型扇風機を設置して空気の循環や湿度の均一化を図ったが、今夏も一部の図書にカビが再発した。温湿度のモニタリングの結果、書庫の夏場の湿度は 70% 台を計測し、恒常的に高湿であることも判明した。そのため、設備的な環境改善が必須と判断し、次年度に除湿機を設置することとした。</li> <li>次期図書館システムは、機能を最重視しながら管理面、費用面からも詳細に比較検証し、最も要求を満たすシステムを選定した。蔵書検索の性能改善、自動貸出機によるセルフ貸出など新しいサービスの充実の他、大問題であった図書館ホームページの脆弱性も解消された。また、ハードウェアを所有しないクラウド版を採用したことで、以後サーバーの入替や OS の維持管理などから解放され、ランニングコストも安定していくことになった。</li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>新システム・新ホームページの活用による利用者サービスの充実</li> <li>不用資料選定基準に基づく蔵書の軽量化（継続）</li> <li>2020 年に向けた収容力の算出と新たな資料排架、及び書架増設の具体化</li> </ol>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>閉架書庫のカビ発生の再発防止に取組み、蔵書の軽量化をサイクル化したことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>次期図書館システムについて、遗漏なく稼働させること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 31. FD 委員会【報告者：委員長 鈴木 剛】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学生による授業評価アンケートを実施する（実施方法を含めた改善点の検討を含む）</li> <li>2. 全学的 FD を実施する</li> <li>3. FD 参加への啓蒙および周知活動を継続する</li> <li>4. 大学院の FD のあり方について検討する</li> <li>5. モデルティーチング顕彰を実施する</li> </ol>
取組の結果と 点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学生による授業評価アンケートを実施する（実施方法を含めた改善点の検討を含む）           <p>今年度は、紙媒体による本アンケートが再開された3回目の該当年度に当たっており、前・後期とも実施した。FD 委員会ではアンケートの実施方法（分野別、自由記述のとり扱い方）についても検討したが、同時に、アンケートの活用方法についての論議が行われた。特に「自由記述」部分の開示の方法と範囲などをめぐり継続して検討することとした。</p> </li> <li>2. 全学的 FD を実施する           <p>「改めて授業の質保証と改善について考える－教育実践を振り返るためのガイド」（3月2日、ゲスト講師：渡辺達雄、金沢大学准教授）を開催した。</p> </li> <li>3. FD 参加への啓蒙および周知活動を継続する           <p>「北海道地区 FD・SD 推進協議会」の企画内容を FD 委員に配信する、教授会で通知する、学内掲示板に掲載するなどの試みを行った。その中で、実際にその企画に参加するなどの動きも生まれた。なお、来年度から2年間、上記の「推進委員会」の幹事校の一員となることが決まっている。</p> </li> <li>4. 大学院の FD のあり方について検討する           <p>今年度は具体的な検討ができなかった。</p> </li> <li>5. モデルティーチング顕彰を実施する           <p>学生による授業評価アンケートの結果をもとに、授業規模別に9名の教員を顕彰し、記念品を授与した。</p> </li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 全学 FD（大学院 FD を含む）のあり方の検討と企画の充実。</li> <li>2. 「教育課程の質保証」プロジェクトとの連携による FD 課題の明確化</li> <li>3. 学生による授業評価アンケートのあり方に関する検討</li> <li>4. 「北海道地区 FD・SD 推進協議会」との連携</li> </ol>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2017 年度は全学 FD の開催通知開始が遅かったので、次年度は早めに計画・周知し、より多くの出席者を得られるようにすること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 32. スミス・ミッションセンター運営委員会【報告者：委員長 日高 嘉彦】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本学の「建学の精神の基本理念」と「ミッション・ステートメント」を具現化した「世にあって星のように輝く」という公式的な文言を、学外により広く伝えるための方策について検討すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>建学の精神をより豊かに具現化するための努力と方策の継続的検討</li> <li>チャペルタイムの充実と活性化への努力及びそのあり方の継続的検討</li> <li>ワーキング・グループの活動の充実と活性化への努力及びそのあり方の継続的検討</li> <li>諸行事の充実と活性化への努力及びそのあり方の継続的検討</li> <li>SMC 関係の学生団体への指導と活動のさらなる活発化</li> <li>国際ボランティアの継続的実施に向けた検討</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<p>1. 建学の精神の具現化</p> <p>毎日の礼拝(チャペルタイム)、SMC ウィーク、講演会、ワーキング・グループの諸活動などを通じて、建学の精神を具現化し、学生の間にキリスト教の精神への理解を中心とした建学の精神が根付き、豊かに育まれるように活動を展開した。特に、ボランティア派遣については、国際ボランティアのほか、熊本地震に対する被災地支援ボランティアとして、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 阿蘇 YMCA ボランティアセンター主催関係（第3弾・第4弾合計 19名）</li> <li>(2) 本学との協定校でもある熊本学園大学ボランティアセンター主催関係(2名)へ学生を派遣した。</li> </ol> <p>また、11 大学の学生が集まり行われた大学間連携ボランティアシンポジウム（2名）にも派遣した。これらは学生団体「北星学園大学学生支援ネット」(通称「北星ネット」) の企画協力を得て実施した。参加した学生達からは人生に影響を与える有意義な経験ができたという報告を受けている。</p> <p>2. チャペルタイムの充実と活性化</p> <p>チャペルタイムが昼休みの時間帯という制限下においても、学生及び教職員の主体性と信教の自由を尊重しつつ、月曜日を讃美や音楽を中心とするミュージックチャペルとし、ボランティアに行った学生の報告会を行うなど、学生が参加しやすい形として実施した。その結果、参加者数は全体では前年より微増だったが、特に学生以外（教職員他）の増加が多かった。もちろん、形式の変更がその原因のすべてではないが、一定の効果をもたらしているものと評価できる。</p> <p>3. ワーキング・グループの活動の充実と活性化</p> <p>キリスト教の理解 WG(ギリシャ語聖書講読会、ヘブライ語聖書講読会、ゴスペルを学ぶ会、ランプの会)、平和の実現 WG(平和講演会開催、講師:矢口以文[詩人・本学名誉教授])、地域社会との連携 WG(クリスマス企画やチャペルコンサートの企画協力、北星起業塾開催)、ボランティア WG(学内ボランティア団体と「北星ネット」との交流検討を開始)など、各 WG での活動を実施した。</p> <p>4. 諸行事の充実と活性化</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) スミス・ミッションウィーク：5月 8 日(月)～5月 12 日(金) 統一テーマ：「あなたの隣人とは -隣人愛と地域共生社会-」、 特別講演会講師：奥田知志氏(日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師、NPO 法人抱樸理事長他)、演題：「いのちの意味が問われる時代に - 生産性とは何か」 講演内容は長年にわたるホームレス支援などの実践に基づき示唆に富むものであった。</li> <li>(2) チャペル講談：6月 8 日 (木) 出演：神田ナザレ氏 (日本基督教団代々木中部教会牧師 北川正弥氏) 演題：聖書講談「超人サムソンの恋」 講談内容もキリスト教理解の一助となつた。今後も新しい企画を検討していく。</li> </ol>

	<p>(3) SMC 合宿旅行：10月 13日（金）～14日（土）（定山渓ビューホテル）      「ドイツの文化に親しもう～宗教改革500年記念」をテーマとして、宗教改革に関する講演やルター讃美歌の研修、ドイツのボードゲームによる交流会などを行い、SMC 委員・学生間の懇親も深めことができ、有意義な機会となった。</p> <p>(4) 宗教改革記念講演会：10月 26日（木）      講師：深井 智朗氏（東洋英和女学院院長・同大学教授）、演題：「宗教改革と現代」      今年は宗教改革500年であり、宗教改革を改めて考える良い機会となった。</p> <p>(5) チャペルコンサート（SMC 学生会やサークルのコンサートは除く）      ① 4/18 大萩康司「ギターの煌めき」      ② 5/31 クアルテット・エクセルシオ「春を告げる弦楽四重奏」      ③ 6/21 Period Music Popurri 「Music for a while～バロック期のイギリスが生んだヘンリー・パーセルの珠玉の作品と共に」      小出あつき（歌）、森 洋子（チェンバロ）、宇田 梓（チェロ）      ④ 7/5 水野 均&amp;古畑亜紀「パイプオルガンとトランペットのひととき」      ※コンサート後、水野 均氏のオルガンレッスン生へのワークショップ開催      ⑤ 11/2 河野 紘子（ピアノ）&amp;鈴木 准（テノール）「チャペルは歌心にあふれて」      ⑥ 12/7 大友 肇 無伴奏チェロコンサート「チャペルに響くバッハ」      チャペルコンサートについては多彩な企画を行っており、来場者も多く、社会に開かれた場としてのチャペルを有する北星ならではの営みとして定着してきている。また、学生が芸術に触れる機会の確保であると共に地域貢献の意義をもつ活動となっている。</p> <p>(6) スミス・ミッションセンター研修会：3月 1日（木）      講師：川島 堅二氏（元恵泉女学園大学学長）、演題：「大学のカルト対策- 現状と課題」      他大学でのカルト対策の状況等の報告があり、参考となる良い研修であった。</p> <p>5. SMC 関係の学生団体への指導と活動のさらなる活発化      5月の新歓のタペ、10月の合宿旅行及び12月のクリスマス礼拝・祝会などの行事を通して、SMC 関係の各学生団体相互の活動理解と親睦交流を深めたことは大変良い機会となった。なお、各学生団体のメンバー確保のために新入会員獲得の工夫が焦眉の課題となっており、「学園推薦入学者の集い」などの場も利用してさらなる PR 活動を行っていく。</p> <p>6. タイへの国際ボランティア継続的実施に向けた検討      大学後援会予算も活用し、第3回目の派遣（学生6名）を実施した。今回は前年度までに参加した学生から要望の多かった「施設での1泊体験」を取り入れた。参加した学生の報告書及びアンケートの結果ではとても好評であった。次年度も継続的実施を検討する。</p> <p>7. クリスマス関係諸行事、特にクリスマスツリー点灯式に向けた検討      例年、12月初めに地域の小学生対象にクリスマス会をチャペルで開催し、引き続きクリスマツツリ一点灯式を実施している。今年からクリスマツツリーの上部に「ベツレヘムの星」を設置し、一層の充実を図った。キャンドルライトを置いたツリー周囲には学生多数が点灯を待っていた。</p> <p>8. チャペル及びオルガンのリーフレット作成      本学チャペル及びオルガンに関して、さらに広く周知・案内していくため、説明用のリーフレット作成費用を次年度当初に予算化した。</p>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>建学の精神をより豊かに具現化するための努力と方策の継続的検討</li> <li>チャペルタイムの充実と活性化への努力及びそのあり方の継続的検討</li> <li>ワーキング・グループの活動の充実と活性化への努力及びそのあり方の継続的検討</li> <li>諸行事の充実と活性化への努力及びそのあり方の継続的検討</li> <li>SMC 関係の学生団体への指導と活動のさらなる活発化【継続】</li> </ol>
自己点検評価委員会からの評価	<p>【評価点】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生ボランティア派遣をはじめ、講演会やコンサートなど積極的に行なったことを評価する。</li> <li>・チャペルタイムの充実と活性化に取組んだ結果、教職員・学生の参加が増加したことを評価する。</li> </ul> <p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「世にあって星のように輝く」の理念を一層具現化すること。</li> </ul>

	<p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・該当なし。</li></ul>
--	--

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 33. 国際教育推進委員会【報告者：委員長 P. グレイ】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大連外国语大学以外の協定校からも交流教員を受け入れるなど、交流教員のあり方について検討すること。</li> <li>・受入留学生の増加策の検討を進めること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<p>1. 国際教育中期計画（「北星国際交流 2020」）について</p> <p>(1) 本学からの派遣留学生等の増加策の検討と実施</p> <p>今年度に引き続き、学生の海外送り出し数増加を目標に、海外協定校の短期プログラム留学制度の整備や、現在、英国のセントラルランカシャー大学で提供されているダブルディグリー制度が他の協定校でも導入可能か検討する。また、英文学科以外の学生へ制度の周知を図る。</p> <p>(2) 海外協定校の新規開拓</p> <p>現在協定校がないオセアニア地域あるいはフランス語圏、ドイツ語圏における協定校の調査・開拓を行う。</p> <p>(3) 本学への受入留学生の増加策の検討と実施</p> <p>新設された奨学金制度について海外協定校に広報し、より質の高い留学生の獲得に努める。また、ホームページと SNS の充実により、本学の日本語教育と国際交流科目の広報に努める。</p> <p>(4) キャンパスの国際化策の検討と実施</p> <p>在学生の国際性を涵養するため、留学生や国内外の訪問者との交流拡大を目指す。その一環として、国際ラウンジを中心に、各種プログラムの質的量的な拡充を行う。</p> <p>2. 「私立大学等改革総合支援事業タイプ 4」の申請について</p> <p>今年度に引き続き、獲得に向け具体的な方策を検討・実施する。</p> <p>3. 情報発信のさらなる整備と強化について</p> <p>公式ホームページおよび公式 SNS の情報をさらに整理充実させていく。その一つとして、国際交流科目の英文表記の授業シラバスを国際的基準で作成・公開する作業を開始する。</p>
取組の結果と 点検評価	<p>1. 国際教育中期計画（「北星国際交流 2020」）について</p> <p>(1) 本学からの派遣留学生等の増加策の検討と実施</p> <p>派遣留学生への奨学金増額を検討し、大学同窓会の派遣留学生向け奨学金制度を実施することができた。また、昨年につづいてインドネシアへの海外インターンシップを実施し、このことが同国の協定校への派遣留学応募者につなげることができた。しかし、海外協定校が持つ短期プログラムや、セントラルランカシャー大学で提供されているダブルディグリー制度と同様な制度については具体的な検討には至らなかった。また、ヨーロッパでのテロや各国の政治情勢が非常に不安定なことも影響し、2017 年度の派遣留学応募者は昨年と比較して減少した。</p> <p>(2) 海外協定校の新規開拓</p> <p>オセアニア地域の大学とは面会し交渉しているところであるが、ドイツ語圏、フランス語圏の大学の開拓を行うことができなかつた。</p> <p>(3) 本学への受入留学生の増加策の検討と実施</p> <p>奨学金制度について海外協定校を訪問し積極的にプロモートした。また、奨学金制度と合わせ日本語等の国際交流科目や本学で学ぶ魅力を伝えるべく大学ホームページの改訂を行っており、4 月に英語版とともに掲出する予定である。</p> <p>また、留学生数の増加に必須の住居としてホームステイ先の確保を課題として取組み、募集先開拓を行った結果、相応の反応を得ることができた。</p> <p>(4) キャンパスの国際化策の検討と実施</p>

	<p>東アジア学生交流プログラム（中国、韓国、台湾）や外務省主催の JENESYS プログラムで来日するラオスの大学生・高校生をキャンパスに招いた。ラオス訪日団との交流は、学園内3校にも募集をかけ、学生交流を実施した。</p> <p>今年3年目を迎えた国際ラウンジプログラムでは、HUIT 学生による新しい企画を実施し、学生交流が活発に行われたが、在学生の国際性をさらに高められる取組みを検討するまでは至らなかった。</p> <p>2. 「私立大学等改革総合支援事業タイプ4」の申請について 前年度に引き続き、大学・短大とも獲得することができた。</p> <p>3. 情報発信のさらなる整備と強化について 海外協定校へのアピールを目的に、公式ホームページでの国際交流関係科目の授業シラバスを国際的な基準で作成し、公開する作業を開始する予定であったが、着手できず次年度の課題とする。</p> <p>4. 【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大連外国语大学以外の協定校からも交流教員を受け入れるなど、交流教員のあり方について検討すること。 国際交流教員制度の拡充について検討し、全ての交換留学を実施している海外協定校と教員交流が可能となる制度を策定することができた。</li> <li>・受入留学生の増加策の検討を進めること。 ホストファミリー宅の開拓が課題の1つであったことから、募集活動を積極的に実施し相応の登録家庭を得ることができた。</li> </ul>
次年度への課題	<p>1. 国際教育中期計画（「北星国際交流 2020」）について</p> <p>(1) 本学からの派遣留学生等の増加策の検討と実施 派遣留学プログラムを中心にして、海外で学ぶ学生を増加させるため、募集説明会の複数開催や各種情報の提供、全学部の在学生の海外への興味関心を促進する国際ラウンジプログラムの開発検討に着手する。</p> <p>(2) 海外協定校の新規開拓 ひきつづき、フランス語圏、ドイツ語圏の協定校について調査・開拓しつつ、加えて、現在協定校のないアジア圏の国についても調査・開拓する。</p> <p>(3) 本学への受入留学生の増加策の検討と実施 受入留学生の奨学金や本学の魅力を積極的に広報し、より質の高い留学生の獲得に努める。また、ホストファミリーを継続して開拓することで登録家庭を増やし、ホームステイプログラムが可能な協定校と交渉して留学生の受け入れ数を増加できるよう検討する。</p> <p>(4) キャンパスの国際化策の検討と実施 改正した海外交流教員制度の早期実施に向け協定校との交渉を進め、多彩な国の教員の交流教員が在籍することで、全学的な国際教育の進展を図る。</p> <p>2. 「私立大学等改革総合支援事業タイプ4」の申請について 国際教育の質向上を図りながら、3年連続で獲得できるよう対応する。</p> <p>3. 情報発信のさらなる整備と強化について 国際交流関係科目の英文表記シラバスについて、新カリキュラムに向けて海外大学に理解されうる内容で作成できるよう検討に着手する。</p> <p>3回目を向かえるイングリッシュキャンプについて、本学の国際化をさらにアピールできるよう内容を検討する。</p>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・奨学金制度の充実、協定校の新規開拓、国際交流教員制度の拡充、補助金の連続獲得など、積極的に国際教育事業に取組んだことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられているが、フランス語圏、ドイツ語圏の協定校の開拓及び派遣・受入留学生の増加策の検討をすすめること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 34. 学生相談専門委員会【報告者：委員長 鴨澤 あかね】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

<b>自己点検評価 委員会からの 前年度の評価</b>	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
<b>本年度の課題</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 今年度の事例検討会で明らかになった、個々の教職員が学生対応の困難を単独で抱え込みがちな傾向について、アクセシビリティ支援室と協力しながら、従来のパブリックな形での事例検討会および研修会を引き続き実施していくのに加え、教職員が気軽に集まって語り合える場を定期的に設けるなどの方策を検討し、可能なものから実施する。</li> <li>2. 事例検討会や日常的なサポート体制を整えながら、引き続き学生相談スタッフの面接技術の向上を図る。</li> <li>3. 学生相談センターは、問題や困難を抱える学生への対応のみならず、すべての学生が健全な大学生活を送れるよう援助する目的で設置されていることをふまえ、学生相談センターの機能や相談スタッフの役割をより学生に知ってもらい、利用しやすくする工夫を模索し実施していく。</li> <li>4. 教職員を対象として、学生相談センターのPR活動を継続的に行う。教職員のメールボックスに掲示している「教職員のための学生相談室利用のてびき」の掲示を継続し、加えて教職員対象のホームページにてびきがPDF化されていることや、学生相談センターの業務について、各教職員にプリントを配布するなどして定期的に注意喚起する。</li> </ol>
<b>取組の結果と 点検評価</b>	<p>1. 昨年度に引き続き、参加者を30名（要事前申し込み）に限定し、踏み込んだ事例の検討ができる場として、事例研修会を開催した。研修会は2017年10月11日、北海道教育大学札幌校の准教授で臨床心理士の平野直己先生を事例のコメントーターとしてお迎えし、教員1名と職員1名が事例を報告、参加者23名で実施した。全体討論では、学生に対応する際の問題点や課題が参加者および平野先生からあがり、参加者で共有することができた。ただし当初17:10から予定していた本研修会と同時刻開始で、急遽、学長選挙の公聴会を開催する旨が申し渡されたため、開始時刻を1時間、終了時刻を30分後ろ倒しする必要に迫られ、よって30分の時間短縮を余儀なくされたこと、また公聴会の開催は参加人数の減少に影響することが予測され、実際に昨年より10名減少したが、それらに関して大学側から十分な配慮をいただけなかったことは非常に残念であった。こういった事態を補完するために、学生相談センターでは事例研修会の報告書を作成し、後日の教授会資料として添付し、報告事項として関係者が発言を行った。</p> <p>教職員が気軽に集まって語り合える場を定期的に設ける方策に関しては、アクセシビリティ支援室と協力し、10月から毎月1回、第3水曜日、17:10～18:10、今期は10月、11月、12月、1月、2月の計5回、「教職員のFree Talk サロン」を開催した。本サロンではアクセシビリティ支援室の田実室長と学生相談センター長の鴨澤が毎回滞在し、参加者は平均5名であった。人数は少ないながらも、日頃、あまり顔を会わせる機会のない人どうしの交流や、それまで互いに知らなかつた情報を交換することのできる、貴重な場になっていると考えている。</p> <p>2. 従来から引き続き、現行相談スタッフ+センター長で毎月1回、事例検討会を実施した。各相談スタッフが持ち回りで1回につき1名、詳細な事例報告後、参加者でディスカッションを行っているが、今年度から、事例報告書を単なる報告書ではなく、事例に対する問題意識を明確にした報告書を作成するという目標を掲げ、それぞれの相談員の課題をより明確にして面接技術を向上させるよう努力した。</p> <p>3. 本課題に関し、初の試みとして、全学生を対象とした「心のワークショップ」を10月（心</p>

	<p>理テストで本当の自分がみえてくる）と 12 月（ヨガストレッチ＆マインドフルネス）に各 60 分、開催することができた。</p> <p>4. 学生相談センターの PR 活動に関しては、教職員のメールボックスに掲示している「教職員のための学生相談室利用のてびき」の掲示を継続した。また 1 の課題でもある「教職員の Free Talk サロン」の案内チラシを教職員のメールボックスや、第 2 研究棟の掲示スペースに掲示し、毎回の開催日の約 1 週間前に全教職員にポスティングするとともに、教授会における報告事項として、関係者が発言して PR した。</p>
次年度への課題	<p>1. アクセシビリティ支援室と協力しながら、パブリックな形での事例検討会および研修会を引き続き実施していく。</p> <p>2. 今年度の事例研修会で特に明らかとなった、教職員間、他部署間の連携の強化が望まれるという課題への取組みとして、アクセシビリティ支援室と連携し「教職員の Free Talk サロン」を引き続き、毎月 1 回、開催する。</p> <p>3. 学生相談スタッフの事例検討会では、引き続き、事例に対する問題意識を明確にした報告書を作成するという目標を掲げ、また日常的なサポート体制を整えながら、学生相談スタッフの面接技術の向上を図る。</p> <p>4. 学生相談センターは、問題や困難を抱える学生への対応のみならず、すべての学生が健全な大学生活を送れるよう援助する目的で設置されていることをふまえ、学生相談センターの機能や相談スタッフの役割をより学生に知ってもらい、利用しやすくする工夫を模索し実施していく。その一環として、今年度開始した「心のワークショップ」を引き続き全 3 回程度開催し、また今年度課題となった開催日時、場所や告知方法を工夫する。</p> <p>5. 教職員を対象として、学生相談センターの PR 活動を継続的に行う。教職員のメールボックスに掲示している「教職員のための学生相談室利用のてびき」の掲示を継続し、また、学生相談センター主催の研修会とその報告、「教職員の Free Talk サロン」や「心のワークショップ」に関する情報を、教授会の報告事項発言や、全教職員への資料のポスティングなどを通じて定期的に実施する。</p>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アクセシビリティ支援室と連携し、「教職員の Free Talk サロン」の開催を始めたこと及び全学生を対象とした「心のワークショップ」を始めたことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・更に学生相談センターの PR 活動に努めること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 35. キャリアデザイン支援委員会【報告者：委員長 阪井 宏】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・障害学生のキャリア形成支援は課題であり、今年度開設したアクセシビリティ支援室、学生相談室と連携した支援活動に取組むこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. キャリアデザインプログラム等の参加意欲喚起</li> <li>2. 福祉専門職に係る学内説明会の実施</li> <li>3. 障害学生のキャリア及び就職支援について検討</li> </ol>
取組の結果と 点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. キャリアデザインプログラム等の参加意欲喚起について             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 近年キャリアデザインプログラムへの参加が減少していることもあり、継続的にニーズを分析しつつ内容の精査を行ってきた。今年度は、参加意欲を喚起させるため、SNS 等を利用して直接学生に情報発信していくことを検討してきた。発信先は、学年や就職希望先（企業・公務員・福祉職など）に知らせることが多く、LINE や Facebook 等の SNS からの発信では、伝えたい情報が埋もれてしまい、学生の目に留まりにくいことも考えられる。</li> <li>(2) 以上のことから、より多くの学生の目に留まることが見込まれる。また、今までと同様、学内メール等の DM やデジタルサイネージ、キャリアデザインプログラム内の告知もしながらこの運用を本格化させていく。</li> </ol> </li> <li>2. 福祉専門職に係る学内説明会の実施について             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 10/4 (水)・11 (水)・18 (水) の 3 日間、キャリアデザインプログラムの時間枠を活用し、福祉専門職に特化した学内初の合同説明会を実施した。病院・施設（高齢・障がい・児童）など 21 法人に出展して頂き、延べ 98 名の学生が参加した。</li> <li>(2) 平日の学内実施という学生の参加しやすさはもとより、他領域の人事・専門職の方々から説明を受けたことで、希望進路の比較検討と、法人と学生の接点から現場見学・選考など実動へと繋がる機会提供となった。内定実績に繋がったことは成果であり、次年度も継続し実施して行きたい。</li> </ol> </li> <li>3. 障がい学生のキャリア及び就職支援について             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) アクセシビリティ支援室との相互協力により、主に発達障がい学生の卒業単位取得に向けた困難への対応や、低学年（2 年生）からの就職支援が可能となった。また、精神疾患など医療機関への受診を要するケースの対応も、学生相談室（臨床心理士）や医務室との連携により行うことが出来た。</li> <li>(2) 障がい学生へのキャリア及び就職支援の強化として、各種研修への参加や先駆的な取組みを行う大学への視察を行った。さらに、対象学生増加への対応と個々の障がい特性に合わせた支援実施のため、就職支援課内の対応体制を次年度より 1 名から 2 名とする。</li> <li>(3) 企業対応（訪問・来学時など）の際に採用実績や求人などの情報収集をするとともに、学内外におけるインターンシップ受け入れについても働きかけを行い、学内（図書館）インターンシップの可能性を見出すことが出来た。次年度以降、具体的な運用方法について司書課との協議を図っていく。</li> <li>(4) 学内において就労相談事業所の担当者・本人・就職支援課担当者による三者面談を行い、就職支援への連携強化と卒業後の就労定着を見据えた支援の道筋を作ることが出来た。</li> </ol> </li> </ol>

次年度への課題	1. 就職支援課内の相談スペースレイアウト変更による環境整備について 2. 障がい学生のキャリア及び就職支援の強化について 3. 就職及びキャリア支援取組みの強化について
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アクセシビリティ支援室をはじめとして各関係部署と連携し、障がい学生のキャリア支援に注力したことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられているが、相談スペースレイアウト変更を円滑に行うこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 36. 社会連携センター運営委員会【報告者：委員長 篠田 優】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・企画運営会議の示す基本方針に基づき、教員・学生が直接地域活動に参加している状況を把握すること。</li> <li>・オープンユニバーシティの受講者が伸び悩んでいる要因について検討すること。</li> <li>・私立大学等改革総合支援事業タイプ2「地域発展」の補助金獲得を目指すこと。</li> <li>・「大学同窓会」「大学後援会」「北星英研」などの業務は、社会連携課の業務であって、社会連携センターの業務ではないので、次年度からは記載しないこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<p>1. 地方自治体等との連携の推進</p> <p>2. オープンユニバーシティ事業の円滑な遂行と募集増に向けた取組み</p>
取組の結果と 点検評価	<p>1. 地方自治体等との連携の推進</p> <p>(1) 厚別区と共同実施している CCRC 事業「キャンパスマウン厚別」を昨年度に引き続き運営をした。全 7 回のうち 3 回を本学教員が担当し、52 名の受講者が本学教室での講義を受講した。次年度は受講者が増えるよう魅力ある内容としたい。また、昨年は同窓会が立ち上がり例会も 6 回開催され地域における具体的な活動などを話し合いメンバー同士の交流も深められたとのことだった。</p> <p>(2) 厚別区三者連携事業の「新さっぽろフォトコンテスト」は今年第 8 回となり、企画、運営、審査、展示、表彰式など三者が連携して行っている。今年は短期大学部生活創造学科生 2 名が入賞を果たした。企画自体については、年々応募者の減少がみられ、本企画が学生や教職員に必ずしも知られていない憾みがあるので、情報発信について検討する必要があると感じられる</p> <p>(3) 「道民カレッジ・大学インターネット講座（ほっかいどう学）」には今年度も参画した。今年度は、短期大学部の遠藤太郎准教授が担当し、引き続き道民の学習環境充実の一翼を担った。次年度は、道民カレッジの事業計画見直し（予算減）によりこれまでのようなインターネット講座の実施が難しい状況が発生したため、大学として参画の仕方について検討する必要がある。</p> <p>(4) 今年度も協定締結には至っていないが、引き続き、新ひだか町の国際交流事業に文学部英文学科が協力しており今年度も 3 月の訪問団に英文学科生 1 名が通訳ボランティアとして参加した。</p> <p>(5) 昨年度に札幌市から協力要請のあった、「札幌市営住宅（もみじ台団地）の大学・短期大学部生への提供事業」については、協議を重ね 11 月に協定を結んだ。その後、在学生に向けた説明会を行い、入居募集、審査を経て 5 名の学生が 4 月に入居する運びとなった。次年度は、札幌市とこの事業をどう展開していくか協議していくこととなる。</p> <p>(6) 現在協定している栗山町や歌志内市との連携については、今年度、具体的な事業についての実施には至らなかったことから、次年度は連携事業を具体化できるよう検討していく。この他にも、教員が直接自治体と連携していることもあることから実態を把握するためアンケートを実施することとした。</p> <p>2. オープンユニバーシティ事業の円滑な遂行と募集増に向けた取組み</p> <p>今年度のオープンユニバーシティは、85 講座 986 名の受講者で実施された。事業の円滑な遂行はできた。しかし、伸び悩んでいる受講者数は、今年度、前年度と比べ 21 名の増加となり下げ止まった感はあるものの、在学生の受講者数の減少は今年も続いた。</p>

	在学生の受講者数の減少という問題は浮かび上がったが、その要因を分析することには至らなかった。次年度は、魅力ある講座の開講、募集方法の工夫など在学生の受講増となるよう講座説明会の開催時期や実施方法など募集に係る工夫を行うこととしたい。
次年度への課題	<p>1. 地方自治体等との連携の推進      2. 教員・学生の地域活動への参加状況の把握と分析      3. オープンユニバーシティ事業の円滑な遂行と受講者数が減少している在学生の原因分析と募集増に向けた取組み</p>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・札幌市と「札幌市営住宅（もみじ台団地）の大学・短期大学部生への提供事業」において協定を締結し、事業を開始したことを評価する。</li> <li>・私立大学等改革総合支援事業タイプ2「地域発展」の補助金を獲得したことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられているが、教員・学生の地域活動への参加状況の把握と分析を行うこと。</li> <li>・札幌市営住宅に居住する学生に対し、学生生活支援課と連携しながら対応すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 37. 総合研究センター（研究支援委員会）【報告者：委員長 竹村 雅史】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

<b>自己点検評価 委員会からの 前年度の評価</b>	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
<b>本年度の課題</b>	<p>1. researchmap システムへの一括データアップロードの対応を継続して実施する。</p> <p>2. 北星学園大学学術情報リポジトリの充実のため、図書館運営委員会との協力のもと、本学の研究成果の発信と蓄積に関わる検証を引き続き行う。</p> <p>3. 今後も e-Rad と日本学術振興会電子申請システムの変更等を視野に入れながら、継続的にシステムの対応に取組んでいく。</p> <p>4. 研究費の不正使用、研究活動における不正行為の防止のガイドラインに基づき教職員全体を対象とした学内説明会を実施し、研究活動における不正行為防止のためのコンプライアンス教育の内容を引き続き検討する。また、理解度テストや eLCoRE を利用した「研究倫理教育受講から理解度確認」＝「履修」の徹底を継続する。</p> <p>5. 研究活動の活性化及び研究水準の向上を図るために、研究環境整備及び支援を継続的に進める。また科学研究費申請補助要員制度や学内説明会、参考資料等を充実させることにより、更なる科学研究費等の外部資金獲得を目指す。</p>
<b>取組の結果と 点検評価</b>	<p>1. researchmap への一括データアップロードについては、昨年度に引き続き教職員 HP にて案内をし、集約・点検を行い実施することができた。また担当者が JST (科学技術振興機構) 主催の researchmap 担当者向け研修会へ参加し、その活用方法等について学ぶ機会を得たことで、個人によるアップデート操作の支援方法や、学内教員情報システムとの関連項目の見直しができた。</p> <p>2. 図書館運営委員会との連携協力により、2014 年 10 月に導入した北星学園大学学術情報リポジトリは今年で 4 年目を迎えた。図書館と情報共有をしつつ、北星論集、科研費の成果報告書、ワーキングペーパーの公開を行っている。昨今のオープンアクセス化に対応するため、研究論文の公開等を含め、今後もリポジトリの充実を進めて行きたいと考えている。</p> <p>3. 府省共通研究開発管理システム（以後、e-Rad）への対応は、現在も適宜実施している。教員自身が設定する e-Rad のログイン ID・パスワードの紛失の多発や、電子化に伴う操作方法の一部複雑化に対処するため、事務担当者による恒常的支援に努めた。当委員会主催で年に 2 度実施する科研費応募要領等学内説明会において、その使用方法等の周知を引き続き行い操作方法等の周知をすると共に、個別の対応も行った。</p> <p>4. 研究費の不正使用、研究活動における不正行為防止のガイドラインに基づき、今年度も教職員全体を対象とした学内説明会を 6 月に開催した。説明会には民間 URA のロバスト・ジャパンより外部講師を招き研究倫理に重きを置いた内容でコンプライアンス教育の充実を図った。研究倫理教育の受講から理解度確認までの「履修」を完遂するため、学内説明会の受講内容を受けた理解度テストを実施し全教育職員へ周知し受講状況の管理を行った。</p> <p>更に、科研費採択者・応募者、研究事務担当者を対象として日本学術振興会の提供する研究倫理 e ラーニングコース eLCoRE (以下、eLCoRE) の履修を義務化し、研究倫理等の理解を深める取組を行った。</p> <p>研究倫理教育については、研究支援課職員が研究倫理教育に関する複数の研修会に参加し学内における研究倫理教育の方法等について情報収集を行った。また他大学の研究倫理規程等も調査し、研究倫理、研究費の不正使用、不正行為防止等の注意喚起を促すことを目的とし、これまで未制定だった研究倫理規程について検討を行い、「北星学園大学・北星学園大学短期大学部における人を対象とする研究倫理規程」を作成し関係会議に上程した。</p>

	<p>研究倫理教育の教材の一つとして、平成 29 年度文部科学省科学研究費助成事業の間接経費を原資として日本学術振興会発行の「科学の健全な発展のために」の書籍を購入し、2018 年度以降の学内説明会で専任教員全員に配布をすることを決定した。</p> <p>また、この研究倫理規程の内容を踏まえ、学内教育職員及び大学院生への配布を目的として「北星学園大学 研究倫理ハンドブック」を作成し、教職員 HP 内にて PDF ファイルで常時閲覧可能とともに、次年度に向けては教育支援課大学院担当部署との連携を図り大学院生への紙媒体による配布も予定している。</p> <p>5. 科研費間接経費による学内 LAN 整備、共用備品等の購入を行い研究環境の充実を図った。科研費公募時期には、間接経費を原資とした科学研究費申請補助員制度の実施や、科研費公募要領等学内説明会での科研費審査員経験者による特別講演を今年度も引き続き実施した。説明会では、電子申請システムの操作方法の説明の他、研究計画調書の作成方法について資料をもとに解説も行った。貸出用の作成事例集を作成し科研費関連書籍を用意し、応募者の質問等に対応した。【2017 年度大学運営計画の 3】</p> <p>6. 企画運営会議から「特定研究費の取扱いの変更（案）」について再検討依頼を受け、今年度一部修正をすることについて協議を行い、結果を企画運営会議に報告した。</p> <p>7. 今年度逝去した名誉教授の追悼号発行に伴い「北星論集刊行要項」に追悼号取扱要領を新たに設けたほか、2018 年度刊行より、名誉教授による北星論集への論文投稿を可能とする要項改定することとした。</p> <p>8. 教員の事務負担の軽減、商品調達時間の軽減、並びに研究費の有効活用を目的として、2018 年度より個人研究費取扱要領を改正し、研究者発注及び立替可能物品購入可能上限金額を従前の 2 万円未満から 10 万円未満へと引き上げることとした。</p> <p>9. 教員評価委員会からの研究費の一部見直し検討依頼を受け、個人研究費取扱要領を改正し、2018 年度より新任教員加算額の制度を廃止することによる一部予算削減を行うこととした。</p>
次年度への課題	<p>1. researchmap システムへの一括データアップロードの対応を継続して実施する他、学内の教員情報システムとの連携に係る入力項目の充実を促していく。また今後、e-Rad との連携が予想される researchmap への新規登録促進を検討する。</p> <p>2. 北星学園大学学術情報リポジトリの充実のため、図書館運営委員会との協力のもと、本学の研究成果の発信と蓄積に関わる検証を引き続き行う。</p> <p>3. 今後も e-Rad と日本学術振興会電子申請システムの変更等を視野に入れながら、継続的にシステムの対応に取組んでいく。</p> <p>4. 研究費の不正使用、研究活動における不正行為の防止のガイドラインに基づき学内説明会を継続して実施し、研究活動におけるコンプライアンス教育の更なる充実を図る。2018 年度からは教育職員、事務職員の他、大学院生も出席の対象とし、大学院生や学生への研究倫理教育の方法等を検討する。その他、理解度テストの内容の検討及び更新、eLCoRE の受講促進、日頃からできるハンドブック等を利用した研究倫理教育の検討を継続する。</p> <p>5. 【2018 年度大学・短期大学部運営計画の 3】に基づき、研究活動の活性化及び研究水準の向上を図るために、文部科学省科学研究費助成事業の間接経費等を利用した研究環境整備及び研究支援を継続的に進める。また科学研究費申請補助要員制度や学内説明会、参考資料等を充実させ、科学研究費等の外部資金獲得のため、本学における研究活動の更なる活性化を目指す。更に大学院生、学部学生も含めた多様な研究スタイルに対応できる制度、支援体制を整えていく。</p>
自己点検 評価委員会から の評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・積極的に研究倫理教育に取組んだことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられているが、更なる科学研究費等の外部資金獲得のための支援体制を強化すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 38. 総合情報センター運営委員会【報告者：委員長 金子 大輔】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学間連携共同教育推進事業の新しい展開に向けて対応すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 第1～10情報実習室、およびCALL教室のパソコンシステムの安定的な運用</li> <li>2. サーバシステム更新に関する検討</li> <li>3. 学内の無線LAN環境の拡充に関する検討</li> <li>4. 学内情報環境に関する抜本的見直しに関する検討</li> </ol>
取組の結果と 点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. パソコンと中間モニタの解像度の違いによる不具合が発生し、解決まで半年を要した。業者選定に際して、納入金額が安価であればよいと言うことでもないことを改めて確認し、次回納入時には、これらの点も踏まえて検討する必要があることを申し送りたい。なお、新しいシステムやOS、アプリケーションを導入したことによる多少の不具合は発生したが、その都度対応できており、大きな問題には至っていない。</li> <li>2. 2019年度に予定しているサーバシステムの更新について、情報収集を行った。さらに、数社と個別に打合せを実施し、本学に適切なサーバシステム案についての働きかけを行った。</li> <li>3. 昨年度要望のあった第1研究棟地下の無線LAN設置については、科研費の間接経費を充て環境整備を行うこととした。さらに、2018年度にA館B館の無線LAN環境整備を実施するため、新規事業として予算計上を行った。</li> <li>4. 無線LAN環境の拡充により、学内から学外への通信量が増大し、インターネットの利用に影響が出ている。キャッシュサーバの設定変更等を行い、さらに根本的な対応として、無線LAN用の回線を増設することとした。これにより、実習室や研究室からの有線と無線LANの通信が分離されるため、通信環境の向上が期待できる。その他学内情報環境に関する見直しについては、サーバシステム更新と合わせて検討する必要がある。</li> <li>5. 大学間連携共同教育推進事業に関しては、入学時学力調査（プレイスメントテスト）と到達度テスト、その結果をWeb経由で個別にフィードバックするeポートフォリオシステム、moodle上の自学自習コース等において、現在活用されているシステムを引き続き利用しており、総合情報センターがシステムの管理などを担当している。</li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 第1～10情報実習室、およびCALL教室のパソコンシステムの安定的な運用</li> <li>2. サーバシステム更新に関する検討</li> <li>3. 学内の無線LAN環境の安定的な運用</li> <li>4. 学内情報環境に関する抜本的見直しに関する検討</li> <li>5. 大学間連携共同教育推進事業の展開に対応したシステムの管理</li> </ol>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・無線LAN環境の拡充を図ると共に、通信量増大に根本的な回線増設対応をとることで本学の通信環境改善を行ったことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2019年度に予定しているサーバシステムの更新については今回得られた業者選定の知見も活かして行うこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 39. 心理臨床センター運営委員会【報告者：委員長 西山 薫】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられている、特別事例検討会の実施に取組むこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研修員（院生）の将来の心理専門職としての資質・技能向上のために、個々の研修員の状況と特性を踏まえた指導を行うとともに、現状のケースの動向（相談の種類、必要とされる治療法等）を加味した実践的な授業展開を行っていく。</li> <li>2. 次年度も同程度の申し込み数を想定して、担当者への振り分け、他施設へのリファーを円滑に行う。また、現在の関連施設との情報交換や連携を継続しつつ、新たなネットワーク作りにも努める。</li> <li>3. 研修員の担当ケース数を恒常的に確保することと、併せて研究員（教員）の指導担当数、負荷を考慮しつつ、効率的で妥当なケース配分を図る。</li> <li>4. 心理臨床センター紀要 13 号を発刊する。</li> <li>5. 特別事例検討会（外部専門家を招聘し、また本学のみでなく他大学院生も対象とする）を実施する。</li> </ol>
取組の結果と 点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 現在、在籍中の研修員では、入学前の学習等の状況（本学他学部や他大学卒、社会人経験の有無）が多様であることから、それらを踏まえた指導に努めた。個別およびグループ形式のスーパービジョン（SV）の場を設ける、また個別 SV の担当研究員と研究上の指導教員を別にするといった従来からの工夫を継続し、さらにケース担当者の選出を行う際や、ケース開始後の個別 SV においても、研修員の個々の特性・能力に応じた対応、指導を心がけた。</li> <li>2. 本年度の申し込み件数は、例年同様、受理可能な件数を超えていたが、申し込みへの対応は概ね円滑に進めることができた。相談担当者への適切な振り分けを行い、また相談内容やこちらの受け入れ可能性を踏まえ、必要に応じて他機関へリファーする等して対応した。近郊の他大学の心理相談センターは主なリファー先であるため、しばしば受け入れ可能性などの情報交換を行っている。また、新たに精神保健、医療機関との繋がりができ、数件だが紹介されるケースもあった。</li> <li>3. 上述の通り、例年のように新規申し込みは継続的にあったが、今年度は時期によって来談者の年齢層や性別が大きく偏るという特徴があった。その様な理由で、一時期研修員の担当ケース数も偏ってしまう事態が発生した。このような申し込みの傾向は偶発的な面が大きいが、受理前の事前の聴取を丁寧に行って、適切な担当者を吟味することで対応している。なお、研究員（教員）は、指導担当数（研修員の SV）、および研究員単独の担当数のバランスを考慮するよう努め、昨年度よりも若干の負担軽減ができたと考える。</li> <li>4. 心理臨床センター紀要 13 号は、田澤編集長のもと発刊に向けて作業は滞りなく進行しており、今年度末に発行できる予定である。</li> <li>5. 3月 4 日（日）13:00～16:30、本学において特別事例検討会を開催する予定である。事例の報告者（本学大学院生、過年度修了生）の準備は滞りなく進行している。また事例のコメントーターに、中京大学心理学部教授の永田法子先生を依頼している。道内他大学の関係大学院および専門家、本学卒業生などに案内を配布済みである。</li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 臨床心理学専攻の新たなカリキュラムに則った院生の指導に努める。必修とされる実習時間数が増えるが、量的な拡充ばかりでなく、研修員として現状のケースのニーズに、より良く対応できるように資質・技能の向上をめざし、実践的な授業展開を行っていく。</li> <li>2. 申し込みの傾向は概ね同様と想定し、引き続き担当者への振り分け、他施設へのリファーを円滑に行う。また同様に、関連施設との情報交換や連携、および新たなネットワーク作り</li> </ol>

	<p>も継続して進めていく。</p> <p>3. 研修員の担当ケース数を、恒常的に確保する。また、研究員の指導担当の過重な負荷も考慮する。</p>
自己点検 評価委員会 からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特別事例検討会（外部専門家を招聘し、また本学のみでなく他大学院生も対象とする）を実施したことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 41. 学習支援推進委員会【報告者：委員長 中村 和彦】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 専任教員の配置を見据えた学習支援プログラムの課題の整理と準備</li> <li>2. 学習支援プログラムの発展と学士課程との連携の模索</li> <li>3. 人材育成としての全学ピア・サポート制度の展開</li> <li>4. 学内各所との連携・協力</li> </ol>
取組の結果と 点検評価	<p>1. 専任教員の配置を見据えた学習支援プログラムの課題の整理と準備</p> <p>2016年10月20日付で学長（企画運営会議議長）に対し、学習サポートセンター専属の専任教員の配置を主とした要望上申の結果、文学部に籍をおく助教（最長5年任期）の採用を進めることができた。採用人事を行った結果、2018年4月1日付で助教1名を採用することとなった。</p> <p>今年度は委員長（センター長）及び、委員半数の交代が重なったが、引き継ぎを受けつつ、委員会内で、課題の抽出と共有をおこなった。特に、2018年2月15日にはリトリートを実施し、委員会・センターの「柱」を確認し、中期的展望も含め課題を整理するとともに、助教着任後の体制についても準備をおこなった。</p> <p>専任職員や非常勤助手等への過重な負担も見受けられ、今後において、人員の視点からの課題についても検討する必要が認識された。</p> <p>2. 学習支援プログラムの発展と学士課程との連携の模索</p> <p>開講型の「学習セミナー」は、「ノート・ティキング」「伝える力」「プレゼン構成力」等、7種類のセミナーを授業期間中のIV講目に毎日開催した。前年度に引き続き、セミナーの内容に関連する授業科目でのアナウンスや学内掲示、Facebook等を活用し周知をはかった。結果として延べ約35名の参加があった。</p> <p>「個別学習支援」として、「統計アワー」「日本語ライティング」「プレゼン・トレーニング」「ランチタイム数楽」を実施した。また担当者と助手等での打合せをおこないながら課題を抽出した。「個別学習支援」には延べ216名の参加があった。その他として「ランチョン・セミナー」を前・後期、4回ずつ実施、参加者が多く学生に好評であり、ラーニング・コモンズへの認知を高め、利用者増につながった。また日常的な個別学習相談等に応じた。</p> <p>今年度の学習サポートセンター主催のFD研修会を学士課程や正課授業との連携を意図し、2018年1月23日（火）15:00～17:00に『ラーニング・コモンズで引き出す学びの実際と正課との連携に向けた課題』と題し、東北学院大学教養学部人間科学科の稻垣忠教授、ラーニング・コモンズの遠海友紀、嶋田みのり両特任助教をお迎えして開催し、教職員31名の参加を得た。学部学科の教育と学習環境の関係、ラーニング・コモンズの効果的活用等について共通理解をはかる結果となった。</p> <p>3. 人材育成としての全学ピア・サポート制度の展開</p> <p>北星ピア・サポーターの活動は、人材育成として視点をもっていることに特徴があるが、さらに充実した内容として展開するために、6月24日に1泊2日の合宿を実施し（52名参加）、ピア・サポーターとしての視野や視点、役割や業務を確認した。また昨年度に引き続き、内容等を見直したうえで、1年目のピア・サポーターを対象とした研修を実施した（9月1日、9月11日、9月12日、参加者計26名）。また11月18日には「キックオフ会」1泊2日の合宿）を開催し、ピア・サポーター活動の振り返りをしつつ、4月のオリエンテーションに向けた準備をスタートさせた。その他にも10月22日には関西大学で開催されたピ</p>

	<p>ア・サポートのイベントに希望者 6 名が参加し、他大学の事例を学び、交流も深めてきた。</p> <p>2018 年 3 月卒業予定の北星ピア・サポーター 22 名を対象に、学士力や社会人基礎力の測定・把握を目的としたリテラシー&amp;コンピテンシーテスト「PROG」(リアセック社) を実施した(2018 年 3 月 7 日ほか)。なお具体的フィードバックを含め、今後、テスト結果の活用について検討していく必要が認識された。</p> <p>そのようななか、新たな動きや展開がみられた。すべての学科からピア・サポーターとしての人材がスムースに得られないという課題があったが、それに対しては「北星ピア・サポーター インターンシップ制度」を創設し 5 名の申込みがあり、人材確保に一定の目途がついた。また 2018 年 2 月 10 日に「第 1 回北星ピア・サポーター ホームカミングデー」を企画し、ピア・サポーター同窓生を含め、現役ピア・サポーター、教職員等、計 46 名の参加で実施することができた。また道内外のピア・サポート活動との交流も進みつつあり、特に、道内大学複数校による「北海道ピア・サポート コンソーシアム：HPSC」の立ち上げ準備が進み、本学ピア・サポーターが代表校としてとり纏め役を担っている。</p> <p>4. 学内各所との連携・協力</p> <p>第 2 回目となる「Hokusei Student Action 2017」を主催し、国際教育センター、広報委員会、学生支援委員会、北星学園大学図書館、北星学園大学生活協同組合の共催により、2018 年 2 月 16 日に、学生、教職員等、計 126 名の参加を得て開催した。「『学び』のための学生プロジェクト助成制度」採択プロジェクトの成果発表、昨年度同様、大学運営に一定の役割を果たしている学内 7 団体の口頭報告、また新たなセッションとして、各団体横断的なグループによるワークショップとコンテスト形式によるプレゼンテーションを行った。</p> <p>昨年同様、学生の就職活動や各種実習で必要とされるさまざまなスキルに関連して、提供している学習支援プログラムの紹介等、就職支援課、社会福祉実習委員会等との連携をはかった。さらにはレポート作成支援に関連して図書館との連携をはかった。なお図書館とは、書籍利用の課題等が確認され、次年度において具体的に取組む必要がある。また北星ピア・サポーターが、所属学科と連携して展開する活動がみられてきた。</p> <p>アクセシビリティ支援室のよびかけにより、「拡大ケース会議」に、学生相談センター、国際教育センターとともに、可能な範囲で参加した。実質的な情報共有、連携については今後の課題であることが認識された。</p>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>専任教員着任後の学習サポートセンター、ラーニング・コモンズの円滑的運営及び、ハード・ソフト両面にわたる中・長期的な課題の抽出</li> <li>学習支援プログラム実施の成果発信と課題整理及び再検討</li> <li>学士課程との連携を意図した学習支援の展開</li> <li>人材育成としての全学ピア・サポーター制度の展開</li> <li>学内関係部署との連携・協力・協働</li> </ol>
自己点検評価委員会からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>各種学習セミナー、個別学習支援等、積極的に学習支援プログラムを行ったこと及びピア・サポーターを人材育成として視点をもって活動したことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>非常勤助手に代わり専任教員を配置したことによる点検評価を行うこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 42. アクセシビリティ支援委員会【報告者：委員長 田実 潔】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

<b>自己点検評価 委員会からの 前年度の評価</b>	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援の妥当性（合理的配慮）等の検証をおこなうこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
<b>本年度の課題</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 支援室オープンと新たな活用</li> <li>2. 全学的協力体制構築や学内外関係部署とのネットワーク構築</li> <li>3. 支援の妥当性（合理的配慮）等の検証</li> <li>4. 全学教職員への啓発活動</li> <li>5. 障害のある学生支援に関わる学生の育成</li> <li>6. 学内ユニバーサルデザインのチェック（継続）</li> </ol>
<b>取組の結果と 点検評価</b>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 支援室オープンと新たな活用  教育支援課隣に新しく設置された支援室は、利用学生の利便性をはかった構造であるとともに、必要な関連部署と共同しながらのワンストップサービスとしての学生支援を円滑に行うことを期待されており、見える化もあいまって有機的学内連携と活用がなされた。具体例としては、ミーティングルームにて利用学生を講師とした手話勉強会（10回）を開催するなど交流の場として有効活用できた。</li> <li>2. 全学的協力体制構築や学内外関係部署とのネットワーク構築  今年度は学生相談センターとの連携に加えて、学習サポートセンターや国際教育課等との連携による拡大会議やケース会議を随時持つことができた。また、個々の事例について関係教員間による相談協議の打ち合わせ会議を行ったり、要請のあった学科に支援室から説明や情報共有に出向くこともあった。学生相談センターとの共催で、教職員フリートークサロンを定期的に開催できたことも全学的協力体制構築の一つの特徴的な取組みであった。  入試に關係して、入試課はもちろん関係学科とも連携し、特に公募推薦入試の前には必要に応じて受験生と学科関係者、支援室とで面談を行った。就職支援課との連携も密に行っており、学生からの要望に応じてインターンシップの計画や企業への見学同行等も行った。</li> <li>3. 支援の妥当性（合理的配慮）等の検証  支援の妥当性については、支援策を策定した後、隨時支援学生や支援環境から情報をフィードバックし、関係者で共有している。その過程で合理的配慮の妥当性についても検証するようにしている。今年度については、アクセシビリティ支援委員会や拡大連携会議を開催して検証するような案件もしくは副学長への報告が必要となるような案件はなく、スムーズな検証作業が行われた。</li> <li>4. 全学教職員への啓発活動  アクセシビリティ支援室主催の研修会等による直接的な啓発活動は日程の都合上企画できなかったが、教職員向けの啓発用冊子の作成・配布や HP の随時更新や『アクセシ便り』の発行等による情報発信を行った。また直接的ではないものの、マスコミ報道等があり、学内に広く周知する機会を得ることができた（北海道新聞 H29. 7. 10、教育学術新聞 H29. 9. 13）。</li> <li>5. 障がいのある学生支援に関わる学生の育成  聴覚に障がいのある学生支援として、ノートテイクを行っているが、今年度も新規のノートテイカー育成として昨年同様養成講座を前期8回後期9回、さらにスキルアップ講習会を1回開催し継続的な育成を心がけることができた。その成果の一環として、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）による第13回シンポジウム（札幌学院大学）に参加し、聴覚障がい学生支援に関する実践事例コンテストにて全国第3位の好成績を収めることができた。</li> </ol>

	<p>6. 学内ユニバーサルデザインのチェック（継続）</p> <p>学内、特に教室や廊下等の室内環境について調査を行い、改善要望として学長に要望書を提出した。時期を見計らっての改善となる予定との回答を得ることができた。</p> <p>7. その他</p> <p>今年度は、筑波技術大学大学院生の障がい学生支援コーディネート実習を2週間受け入れた。初めてのことであったが、学外組織との連携協力も進んだ年であった。</p>
次年度への課題	<p>1. 全学的協力体制の構築</p> <p>学生相談センターや学習サポートセンター、医務室、入試課、就職支援課等々との有機的連携を探り深めていく。個人情報の取扱をはじめ、縦割りではない横の連携によるさらなる協力体制を構築していく。</p> <p>2. 支援の妥当性（合理的配慮）等の検証</p> <p>授業および試験における支援や就職活動、実習の判断や進路変更など、全学的な合理的配慮の妥当性について、実際の事例を振り返り検討する。</p> <p>3. 全学教職員および学生への啓発活動</p> <p>研修会以外にも、授業（北星学など）を通じて教職員のみならず、障がい者支援に関する知的伝達および啓発活動にも取組むこととする。教職員向けの研修会や実技講習会、学生向けの授業設定等を検討する。</p> <p>4. 障がいのある学生支援に関わる学生の育成</p> <p>PEPNet-Japan シンポジウムへの参加による今年度の成果により、来年度は学生派遣の予算を確保することができ、学生のモチベーション高揚と新規ティマーの育成に継続して取組む。また、学習サポートセンターとの協働も視野に、ピアサポートによる障がい学生支援の可能性についても取組む。</p> <p>5. 学内ユニバーサルデザインの検討</p> <p>毎年の恒例事業として継続する。</p> <p>6. 高校および就労先との連携</p> <p>障がいのある高校生や高校との入学前の連携（オープンキャンパス等）や就職支援課によるアフターフォロー等での連携を模索し取組む。</p> <p>7. 『アクセシビリティ支援室年報（仮称）』の発行</p> <p>アクセシビリティ支援室の取組の成果を、学内のみにとどめるのではなく広く学外にも周知することで、取組みの客観性を担保することとしたい。個人情報やプライバシーへの十分な配慮のもと、記録としてあるいは学術的価値のあるものとして活字媒体で残しておくこととする。</p>
自己点検評価委員会からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生相談センター、学習サポートセンター、国際教育課、入試課、就職支援課等と連携し、情報共有・学生支援を積極的に行ったことを評価する。</li> <li>・本学ノートティマーが聴覚障がい学生支援に関する実践事例コンテストにおいて、全国第3位となったことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 43. 安全衛生委員会【報告者：委員長 田村 信一】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価 委員会からの 前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生・教職員に対する安全衛生・健康管理機能の充実を図るため、安全衛生委員会と他部署との連携を行い、組織体の設置・変更等を視野に入れた多面的な検討を確認することとしたが、その具体的な取組内容が記載されていない。次年度の課題にも挙げているので、取組内容を具体化すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教職員のメンタルヘルス対策を引き続き実施していく。2016 年度実施のストレスチェックの検証及びその結果に対する内容・実施体制の再検討を行う。〔継続〕</li> <li>2. 教職員の過重労働を未然に防ぐための方策の検討を実施する（新規）</li> <li>3. 学生・教職員に対する安全衛生・健康管理機能の充実を図るため、安全衛生委員会と他部署との連携を行い、組織体の設置・変更等を視野に入れた検討を行う。〔継続〕</li> <li>4. 国外渡航者、受入留学生を含めた大学教職員・学生に対する感染症等（インフルエンザ・ノロウイルスも含む）の取扱いの検討を行う。〔継続〕</li> <li>5. 2016 年度において、産業医による月 1 回の職場巡回が不十分だったので、職場巡回を強化して行う。〔継続〕</li> <li>6. 事務職員の衛生管理者育成及び委員会構成員の体制を再構築する。（新規）</li> </ol>
取組の結果と 点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教職員のメンタルヘルス対策を引き続き実施していく。2016 年度実施のストレスチェックの検証及びその結果に対する内容・実施体制の再検討を行う。〔継続〕             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) メンタルヘルス対策における職場復帰支援 メンタルヘルス不調により休業した労働者の職場復帰が促進されるよう、厚生労働省の手引きをもとに学内が「ガイドラインを作成した。</li> <li>(2) 管理職のためのメンタルヘルス講演会の実施 日 時：2018 年 1 月 24 日（水）13:00～ C 館 5 階 C 502 講 師：北海道薬科大学 薬学部 教授 三浦 淳 氏 内 容：メンタルヘルス不調者が発生した場合の「管理職」対処方法と、管理職自身のメンタルヘルス対策について説明</li> <li>(3) ストレスチェックの検証について 集団分析は、男性・女性及び、教員・職員の集団に分けて実施した。ストレスチェック結果を検証するまでには至らず、引き続き次年度の課題とする。</li> </ol> </li> <li>2. 教職員の過重労働を未然に防ぐための方策の検討を実施する（新規） 事務・用務職員においては、局課長会議にて、超過勤務を要する場合は事前に当該課長に対し超過勤務報告票による申告を行うルールの確認を複数回行い、超過勤務は減少傾向にある。教員については、労働時間の実態を把握する必要性を感じる。</li> <li>3. 学生・教職員に対する安全衛生・健康管理機能の充実を図るため、安全衛生委員会と他部署との連携を行い、組織体の設置・変更等を視野に入れた検討を行う。〔継続〕 実施できず。引き続き次年度への課題とする。</li> <li>4. 国外渡航者、受入留学生を含めた大学教職員・学生に対する感染症等（インフルエンザ・ノロウイルスも含む）の取扱いの検討を行う。〔継続〕             <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 「麻しん（はしか）等感染症に関する調査（お願い）」を全新任教職員対象とし、調査を</li> </ol> </li> </ol>

	<p>実施し、抗体保有率が低いことが判明した。</p> <p>(2) 国際交流拡大に伴う、国外からの感染による感染症等の扱いの検討を行う。 実施できず。</p> <p>(3) 学生に対する感染症等（インフルエンザ・ノロウイルスも含む）の取扱いの検討を行う。 実施できず。教職員については、対策の検討を次年度への課題とする。学生に関しては、然るべき会議へ対策の検討を働きかける。</p> <p>5. 2016年度において、産業医による月1回の職場巡視が不十分だったので、職場巡視を強化して行う。〔継続〕 時間が取れず実施できない月もあった。不十分であったため、次年度への課題とする。</p> <p>6. 事務職員の衛生管理者育成及び委員会構成員の体制を再構築する。（新規） (1) 卫生管理者的育成 実務経験をさせ育成中。次年度、衛生管理者資格試験受験。</p>
次年度への課題	<p>1. 教職員のメンタルヘルス・過重労働を未然に防ぐための方策を引き続き実施していく。〔継続〕</p> <p>2. 学生・教職員に対する感染症の取扱いの具体的な検討を行う。〔継続〕</p> <p>3. 月1回の職場巡視が不十分だったので、職場巡視を強化して行う。〔継続〕</p> <p>4. 学生・教職員に対する安全衛生・健康管理機能の充実を図るために、安全衛生委員会と他部署との連携を行い、組織体の設置・変更等を視野に入れた検討を行う。〔継続〕</p>
自己点検 評価委員会から の評価	<p>【評価点】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul> <p>【努力課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ストレスチェック結果の検証を行い、教職員のメンタルヘルス・過重労働を未然に防ぐための方策を検討すること。</li> <li>・産業医による職場巡視が不十分だったので、職場巡視の強化を検討すること。</li> </ul> <p>【改善勧告】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>

## 2017 年度 自己点検評価報告書

### 44. 事務局報告【報告者：事務局長 桑原 大幸】

#### ◎ 取組の結果と点検評価

自己点検評価委員会からの前年度の評価	<p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事務職員行動目標の実質化に向けて取組むこと。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし。</li> </ul>
本年度の課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「新事務組織体制の点検」に基づく各課事務分掌及び決裁権限・ルート等の調整・見直し</li> <li>2. 職員の資質向上を目的とする研修等の継続的実施及び6大学による大学間連携事業並びに北海道大学等との大学間職員短期派遣研修への取組み</li> <li>3. 事務職員行動目標の実質化に向けた取組み</li> <li>4. 時差勤務体制の導入の検討など「運営・財務点検委員会」からの提言への対応</li> </ol>
取組の結果と点検評価	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学園課長事務長研修会及び局課長会議で新事務組織体制の現状の課題等について点検を行った。次年度も引き続き点検を行い、課題等を整理した上で、課間の事務分掌の見直しや事務職員の配置数等の確認を行う。決裁権限・ルート等については個別に調整・見直しを行ったが、次年度も必要に応じて点検を行う。</li> <li>2. 毎年開催している「大学SD研修会」については、職員の資質向上を目指しプログラム内容を工夫して実施した。昨年度4年ぶりに開催した「学園事務職員のための基礎研修会」(採用後1~3年対象)は今年度開催できなかったが、次年度は開催する方向で準備を行う。六大学による大学間連携事業については、8月と2月に開催された「六大学職員交流研修会・懇談会」に参加した。北海道大学等との「大学間職員短期派遣研修」については、今年度は派遣及び受入れのどちらも実施できなかった。</li> <li>3. 事務職員行動目標の実質化に向けた取組みについては、学園事務職員募集要項に「求める人材」を掲載しているが、学園全体で取り組む必要があるので、学園課長事務長会議で検討することとした。</li> <li>4. 2017年度当初予算編成に合わせ超過勤務の削減を目標とし、昨年度様式変更した「超過勤務・休日勤務命令・報告票」による超過勤務の事前申請を徹底するよう努めた。時差勤務体制の導入等については、具体的な検討には至らなかった。</li> </ol>
次年度への課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「新事務組織体制の点検」に基づく課間事務分掌の見直しや事務職員の配置数等の確認</li> <li>2. 職員の資質向上を目的とする研修等の継続的実施及び6大学による大学間連携事業並びに北海道大学等との大学間職員短期派遣研修への取組み</li> <li>3. 時差勤務体制の導入の検討など「運営・財務点検委員会」からの提言への対応</li> <li>4. 北星学園固定資産及び物品調達規程（調達に係る承認手続）に基づいた適正な処理の実施についての徹底</li> </ol>
自己点検評価委員会からの評価	<p><b>【評価点】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2017年度当初予算編成に合わせ超過勤務の削減を目標とし超過勤務の事前申請を徹底するよう努めたことを評価する。</li> </ul> <p><b>【努力課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度への課題に挙げられているが、運営・財務点検委員会からの提言への対応及び固定資産及び物品調達規程に基づいた適正な処理の実施を徹底すること。</li> </ul> <p><b>【改善勧告】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・該当なし</li> </ul>